ヨハネの福音書（31）
「宮きよめの祭りでの論争」
ヨハ 10：22〜42

1. 文脈の確認
   (1) 前書き（1：1〜18）
   (2) イエスの公生涯（1：19〜12：50）
      ①公生涯への序曲（1：19〜51）
      ②初期ガリラヤ伝道（2：1〜12）
      ③最初のエルサレム訪問（2：13〜3：36）
      ④サマリア伝道（4：1〜42）
      ⑤ガリラヤ伝道の再開（4：43〜54）
      ⑥2 度目のエルサレム訪問（5：1〜47）
      ⑦後期ガリラヤ伝道（6：1〜7：9）
      ⑧3 度目のエルサレム訪問（7：10〜10：42）
         ＊宮きよめの祭りでの論争（10：22〜42）

2. 注目すべき点
   (1) 宮きよめの祭りでの論争は、十字架の死の約 4 ヶ月前に起こった。
   (2) イエスとエルサレムの宗教的指導者たちの対立が激化する。
   (3) イエスは、危機的転機を迎える。

3. アウトライン
   (1) 論争の第一段階（22〜30 節）
   (2) 論争の第二段階（31〜32 節）
   (3) 論争の第三段階（33〜39 節）
   (4) 追記：積極的な情報（40〜42 節）

4. 結論：今日の信者への適用

イエスは冒涜者ではなく、神である。
宗教的指導者たちとの論争を通して、それが明らかになる。

Ⅰ．論争の第一段階（22〜30 節）

1. 22〜23 節

Joh 10:22　そのころ、エルサレムで宮きよめの祭りがあった。時は冬であった。

Joh 10:23　イエスは宮の中で、ソロモンの回廊を歩いておられた。

(1)「**そのころ**」

①物語は新たな場面に突入する。

②神殿の清めと回復を記念する祭りに、まことの神殿である方が来られた。

(2) 宮きよめの祭りは、巡礼祭ではない。

①プリムの祭りと宮きよめの祭りは、モーセの律法には出て来ない。

②宮きよめの祭り（神殿奉献記念祭）は、ヘブル語で「ハヌカ」（奉献）という。

③前 165 年、セレウコス朝（アンティオコス・エピファネス）から解放された。

④マカベア戦争により、ユダヤ人たちは独立を勝ち取った。

⑤8 日間、神殿の油が切れなかった。光の祭り。

⑥パリサイ人たちは、この 8 日間の祭りの継続を決め、今日に至る。

⑦クリスマスと宮きよめの祭りが、時期的に重なる。

(2)「**時は冬であった**」

①ヨハネは、霊的な冬を暗示していると思われる。

②霊的冷たさの中で、イエスは、「わたしの羊はわたしの声を聞く」と言われる。

③22 節は、受難に向かい始める重要な転換点である。

(3)「**ソロモンの廊を歩いておられた**」

①神殿の東側に位置する南北に延びた廊（屋根付の空間）である。

②ラビたちが講話を語る場所であった。

③イエスが歩きながら教えていた可能性がある。

2. 24 節

Joh 10:24　ユダヤ人たちは、イエスを取り囲んで言った。「あなたは、いつまで私たちに気をもませるのですか。あなたがキリストなら、はっきりと言ってください。」

(1) ユダヤ人たちとは、エルサレムの指導者たちである。

①彼らは、イエスを包囲した。彼らの強い決意が見える。

②「**いつまで私たちに気をもませるのですか**」は苛立ちと敵意がにじむ問いかけ。

③彼らの問題は、情報の不足ではなく、啓示に対する信仰の欠如である。

④彼らは、ことば尻を捕らえてイエスを逮捕しようとした。

3. 25〜30 節

Joh 10:25　イエスは彼らに答えられた。「わたしは話したのに、あなたがたは信じません。わた

しが父の名によって行うわざが、わたしについて証ししているのに、
Joh 10:26　あなたがたは信じません。あなたがたがわたしの羊の群れに属していないからです。
Joh 10:27　わたしの羊たちはわたしの声を聞き分けます。わたしもその羊たちを知っており、彼らはわたしについて来ます。
Joh 10:28　わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは永遠に、決して滅びることがなく、また、だれも彼らをわたしの手から奪い去りはしません。
Joh 10:29　わたしの父がわたしに与えてくださった者は、すべてにまさって大切です。だれも彼らを、父の手から奪い去ることはできません。
Joh 10:30　わたしと父とは一つです。」

(1) イエスのメシア性は、明確に証明されている。

①教えによって

「わたしは命のパンです」(6：35)

「わたしは世の光です」(8：12)

「アブラハムが生まれる前から、わたしはある」(8：58)

②奇跡によって（父の御名によって行うわざ）

(2) 6 つの重要な教えが登場する。

①信じないのは、彼らがイエスの羊に属していないから（26 節)。

＊イエスとの関係性が否定される。

②信じた人たちは、イエスの声を聞き分ける（27 節)。

＊羊は牧者の声を識別して従うことができる。

③イエスは彼らのことを知っている（27 節)。

＊深い愛の関係と選びに基づく個人的な知識を表している。

④彼らは、イエスについて行く（27 節)。

＊日々の継続的な従順と追従を意味する。

⑤彼らには、永遠の保証が与えられている（28 節)。

＊永遠に滅びることはないとの絶対的保証を意味する。

⑥彼らをイエスに与えたのは、天の父である（29 節)。

＊人間・悪魔・死など、いかなる存在も、羊を天の父から引き離す力はない。

(3)「わたしと父とは一つです」

①ユダヤ的には、これはイエスの神性宣言である。

②「一つです」（ヘン）は、機能的一致や目的の一致を越えた存在における一致。

③そして、ユダヤ人の指導者たちは、その部分は十分理解した。

II．論争の第二段階（31〜32 節）

1．31 節

Joh 10:31　ユダヤ人たちは、イエスを石打ちにしようとして、再び石を取り上げた。

（1）ユダヤ人の指導者たちは、イエスのことばの意味をよく理解した。

①イエスは、最も明白な方法で神性宣言をしている。

②彼らは、イエスを石打ちにしようとして、また石を取り上げた。

③ヨハ 8：59 で同様の記事が出ていた。

2．32 節

Joh 10:32　イエスは彼らに答えられた。「わたしは、父から出た多くの良いわざを、あなたがたに示しました。そのうちのどのわざのために、わたしを石打ちにしようとするのですか。」

（1）イエスの冷静な回答

①イエスは、エルサレムにおいて数々の癒やしを行われた。

②それらの癒やしは

、父から出た良いわざである。

③そのうちのどのわざが、ユダヤ人の指導者たちを怒らせたのか。

III．論争の第三段階（33〜39 節）

1．33 節

Joh 10:33　ユダヤ人たちはイエスに答えた。「あなたを石打ちにするのは良いわざのためではなく、冒涜のためだ。あなたは人間でありながら、自分を神としているからだ。」

（1）イエスが行った良いわざは、問題ではない。

①安息日の癒しに対しては、怒っていたはずなのに、それに触れていない。

（2）人間でありながら、自分を神とするのが問題である。

①イエスが単なる人間だという前提は変えない。

②彼らは、イエスの意図をさらに明確にことばにしている。

③これが冒とく罪になるのは、イエスが単なる人間である場合のみである。

2．34〜36 節

Joh 10:34　イエスは彼らに答えられた。「あなたがたの律法に、『わたしは言った。「おまえたちは神々だ」』と書かれていないでしょうか。

Joh 10:35　神のことばを受けた人々を神々と呼んだのなら、聖書が廃棄されることはあり得ないのだから、

Joh 10:36　『わたしは神の子である』とわたしが言ったからといって、どうしてあなたがたは、父が聖なる者とし、世に遣わした者について、『神を冒涜している』と言うのですか。

(1) ここでは、ラビ的議論を理解する必要がある。

①旧約聖書から引用し、それを適用しながら論を展開する。

②「あなたがたの律法に、〇〇と書いてはいないか」

＊ユダヤ人たちは、律法を与えられていることを誇りとした。

＊ここでは、「律法」は旧約聖書全体を指している。

(2) イエスが引用したのは、詩 82：6 である。

①神は、正しい裁きを地上に実現するために、人間の裁き人を立てる。

②彼らは、神の代理人として裁きを行う。

③そういう意味で、彼らは「神々」である（ヘブル語でエロヒム）。

(3) 引用聖句の解釈と適用（35〜36 節）

①「聖書は破棄されるものではない」とは、イエスの聖書観である。

②ここには、カル・バホメル（大から小へ）の議論がある。

③限界を持った人間の裁き人が、「エロヒム」と呼ばれている。

④それなら、限界を持たない自分のことを、「神の子」と呼ぶのは当然である。

3. 37〜38 節

Joh 10:37　もしわたしが、わたしの父のみわざを行っていないのなら、わたしを信じてはなりません。

Joh 10:38　しかし、行っているのなら、たとえわたしが信じられなくても、わたしのわざを信じなさい。それは、父がわたしにおられ、わたしも父にいることを、あなたがたが知り、また深く理解するようになるためです。」

(1) わざがイエスのメシア性を証明している。

①イエスが行っているわざは、「父のみわざ」である。

②イエスのことばが信じられなくても、イエスのわざを信用することはできる。

③「**父がわたしにおられ、わたしも父にいる**」

＊これもまた、イエスの神性宣言である。

4. 39 節

Joh 10:39　そこで、彼らは再びイエスを捕らえようとしたが、イエスは彼らの手から逃れられた。

(1) ユダヤ人の指導者たちはまた、イエスを捕らえようとした。

①ヨハ 7：30、32、44、8：20 参照

(2) イエスは、彼らの手から逃れた。

①逃れた方法は記されていない。

②逃れた理由が重要である。また、時が来ていない。

③間もなく、イエスが自らを彼らの手に委ねる時が来る。

Ⅳ. 追記：積極的な情報（40〜42 節）

1. 40 節

Joh 10:40　そして、イエスは再びヨルダンの川向こう、ヨハネが初めにバプテスマを授けていた場所に行き、そこに滞在された。

(1) 場所は、ヨルダン川の東、ペレアである。

①ここは、サンヘドリンの支配が及ばない地区である。

②バプテスマのヨハネの活動は、主にペレアで行われた。

③ここは、イエスが公生涯を始めた場所でもある。

④イエスは、公生涯の終わりにそこに戻られた。

⑤そこは、中央の宗教的権威からは隔離された、孤独な場所である。

2. 41〜42 節

Joh 10:41　多くの人々がイエスのところに来た。彼らは「ヨハネは何もしるしを行わなかったが、この方についてヨハネが話したことはすべて真実であった」と言った。

Joh 10:42　そして、その地で多くの人々がイエスを信じた。

(1) その地で、多くの霊的収穫があった。

①ユダヤやエルサレムでの状況とは、好対照である。

②論争と拒絶にもかかわらず、神の働きは進んでいる。

(2) 信じた人たちは、バプテスマのヨハネの影響を受けていた。

①ヨハネは、奇跡を行ったわけではない。

②ヨハネは、メシアについて証言し、それがすべて真実であった。

③ヨハネは、メシアの先駆者としての使命を十分に果たした。

結論：今日の信者への適用

1. イエスは神だということを知れば、信仰が増し加わる。

(1) 自力で信仰を増し加えるわけではない。

(2) 信仰とは、啓示された真理への応答として生まれる。

（3）信仰とは、量ではなく、質である。

2. イエスは神だということを知れば、イエスの羊としての自覚が増し加わる。
   （1）私たちはさまざまな情報・声・意見に囲まれている。
   （2）何より大切なのは、みことばを通して語られるイエスの声を聞くこと。
   （3）「わたしは彼らを知っており」は、親密な交わりと選びの関係を意味する。

3. イエスは神だということを知れば、救いの確信が増し加わる。
   （1）「彼らは永遠に、決して滅びることがなく、また、だれも彼らをわたしの手から奪い去りはしません」
   （2）これは、神による救いの保証であり、私たちの信仰生活の大きな支えである。
   （3）救いの根拠は、神の力と忠実さにある。

ヨハネの福音書（32）
「ラザロの復活（1）」
ヨハ 11：1〜27

1. 文脈の確認
   (1) 前書き（1：1〜18）
   (2) イエスの公生涯（1：19〜12：50）
      ①公生涯への序曲（1：19〜51）
      ②初期ガリラヤ伝道（2：1〜12）
      ③最初のエルサレム訪問（2：13〜3：36）
      ④サマリア伝道（4：1〜42）
      ⑤ガリラヤ伝道の再開（4：43〜54）
      ⑥2 度目のエルサレム訪問（5：1〜47）
      ⑦後期ガリラヤ伝道（6：1〜7：9）
      ⑧3 度目のエルサレム訪問（7：10〜10：42）
      ⑨公生涯の締めくくり（11〜12 章）
         ＊ラザロの復活（第 7 のしるし）（11：1〜44）

2. 注目すべき点
   (1) 7 つの「しるし（セーメイオン）」の中の最後で最大の「しるし」
   (2) 11 章が公生涯のクライマックスで、12 章から十字架に向かう。
   (3) 神の愛と遅延の逆説が啓示される。
   (4) 復活に関するマルタとの対話が重要である。
   (5) 国の指導者たちは、信仰によって応答しなければならない。

3. アウトライン
   (1) イエスと弟子たちの対話（1〜16 節）
   (2) イエスとマルタの対話（17〜27 節）
   (3) イエスとマリアの対話（28〜32 節）
   (4) イエスとラザロの対話（33〜44 節）
   （今回は、(1) と (2) を取り上げる）

4. 結論：今日の信者への適用

イエスは、死者をよみがえらせる方である。

4 種類の人たちとの会話を通して、イエスが死者をよみがえらせる方であることが分かる。

Ⅰ．イエスと弟子たちの会話（1〜16 節）

1．1〜3 節

Joh 11:1　さて、ある人が病気にかかっていた。ベタニアのラザロである。ベタニアはマリアとその姉妹マルタの村であった。

Joh 11:2　このマリアは、主に香油を塗り、自分の髪で主の足をぬぐったマリアで、彼女の兄弟ラザロが病んでいたのである。

Joh 11:3　姉妹たちは、イエスのところに使いを送って言った。「主よ、ご覧ください。あなたが愛しておられる者が病気です。」

(1) ヨハネは、マリアを中心にこの一家を紹介している。

①「**主に香油を塗り、自分の髪で主の足をぬぐったマリア**」と説明している。

②ヨハネは、時間を逆転させてこのことを記している（12 章で起こる）。

③イエスは、エルサレム近郊にあったベタニア村のこの一家を愛された。

④エルサレムに近いので、十字架の死につながって行く予感がする。

(2) ラザロが病気にかかっていた。

①罪が原因だという指摘は、全くない。ラザロは義人である。

②姉妹たちは、イエスのところに使いを送った。

＊イエスがいた所までの距離は、1 日である。

③「**あなたが愛しておられる者**」というのが、イエスへの懇願のベースにある。

④ところが、ラザロはその直後に亡くなった。

2．4〜6 節

Joh 11:4　これを聞いて、イエスは言われた。「この病気は死で終わるものではなく、神の栄光のためのものです。それによって神の子が栄光を受けることになります。」

Joh 11:5　イエスはマルタとその姉妹とラザロを愛しておられた。

Joh 11:6　しかし、イエスはラザロが病んでいると聞いてからも、そのときいた場所に二日とどまられた。

(1) イエスの洞察力

①この病気の最終結末は、肉体の死ではない。

②ラザロはよみがえり、神の栄光が現れる。

③それによって、神の子は栄光を受ける。

(2) ここには、アイロニー（皮肉）がある。

①イエスは、父なる神に従順に歩む。

②イエスはラザロにいのちを与えるが、そのことがイエスを十字架の死に導く。
③十字架の死は、イエスの栄光の現れである。

(3)「**しかし**」（ウーン）は、「それで」と訳すことができることばである。
①「それで、イエスはなおもその場所に 2 日とどまった」のである。
②この遅延は、「今すぐ助ける」のではなく、「神の栄光」へと導く愛である。
③神の愛は、私たちの期待とは異なる。

3. 7〜10 節

Joh 11:7　それからイエスは、「もう一度ユダヤに行こう」と弟子たちに言われた。
Joh 11:8　弟子たちはイエスに言った。「先生。ついこの間ユダヤ人たちがあなたを石打ちにしようとしたのに、またそこにおいでになるのですか。」
Joh 11:9　イエスは答えられた。「昼間は十二時間あるではありませんか。だれでも昼間歩けば、つまずくことはありません。この世の光を見ているからです。
Joh 11:10　しかし、夜歩けばつまずきます。その人のうちに光がないからです。」

(1) イエスは、「**もう一度ユダヤに行こう**」と言われた。
①行動を起こす時が来たのである。
②弟子たちは、もう一度ユダヤに行くのは危険だと判断した。
③盲人の癒やしの後で、ユダヤ人たちはイエスに石を投げようとした。

(2) イエスの認識
①ベタニアに行くのは、そんなに危険なことではない。
②神の御心の内を歩めば、つまずくことはない。
③十字架の時が来るまでは、昼間（神が定めたタイミング）が続く。

4. 11〜13 節

Joh 11:11　イエスはこのように話し、それから弟子たちに言われた。「わたしたちの友ラザロは眠ってしまいました。わたしは彼を起こしに行きます。」
Joh 11:12　弟子たちはイエスに言った。「主よ。眠っているのなら、助かるでしょう。」
Joh 11:13　イエスは、ラザロの死のことを言われたのだが、彼らは睡眠の意味での眠りを言われたものと思ったのである。

(1) イエスのことば
①ラザロは「**わたしたちの友**」である。
②イエスの命令を実行する人は、友である。
③ラザロは眠っている

＊死ぬと、肉体は眠ったようになる。

＊信者の死にのみ適用することばである。

③彼を起こしに行く。よみがえらせるために行く。

＊イエスの主権が表明されている。

(2) 弟子たちの応答

①眠っているなら、行かなくても助かるでしょう。

②彼らは、ベタニアに行かないための口実を設けている。

③彼らは、ラザロは回復していると思った。

5. 14〜15 節

Joh 11:14　そこで、イエスは弟子たちに、今度ははっきりと言われた。「ラザロは死にました。

Joh 11:15　あなたがたのため、あなたがたが信じるためには、わたしがその場に居合わせなかったことを喜んでいます。さあ、彼のところへ行きましょう。」

(1) イエスは意図を明らかにされた。

①ラザロは死んだ。

②自分がその場に居合わせなかったことを喜んでいる。

＊弟子たちが信仰に導かれることを喜んでいる。

③もしイエスがそこにいたなら、ラザロは死んでいなかった。

＊イエスの前で人が死んだという記録はない。

④ラザロが死んでいなかったら、よみがえりの奇跡が行われることもなかった。

(2) イエスは、「**あなたがたが信じるためには**」と言われる。

①弟子たちはすでに信じていたが、まだ信仰が成長する余地があった。

②「死に打ち勝つ主」としての信仰は、まだ不完全である。

6. 16 節

Joh 11:16　そこで、デドモと呼ばれるトマスが仲間の弟子たちに言った。「私たちも行って、主と一緒に死のうではないか。」

(1) トマスは、疑り深い人物として有名である。

①ここでは、自己犠牲の精神を表明し、リーダーシップを発揮している。

②しかしこれは、落胆から出た開き直りのことばのようである。

(2) 彼は、理解できなくても主に従うという信仰を発揮した。

①彼の意図とは異なるが、結果的に、弟子たちのほぼ全員が殉教の死を遂げる。

Ⅱ．イエスとマルタの会話（17～27 節）

1．17～19 節

Joh 11:17　イエスがおいでになると、ラザロは墓の中に入れられて、すでに四日たっていた。
Joh 11:18　ベタニアはエルサレムに近く、十五スタディオンほど離れたところにあった。
Joh 11:19　マルタとマリアのところには、兄弟のことで慰めようと、大勢のユダヤ人が来ていた。

（1）ラザロは 4 日間墓に入っていた。

①使者がイエスのところに来るのに 1 日かかる。
②イエスは、そこに 2 日とどまった。
③イエスがベタニアに来るのに 1 日かかった。
④パリサイ人たちは、死者の魂は 3 日間、死体の上を漂っていると教えていた。
⑤4 日経つということは、蘇生の見込みがなくなったという意味である。
⑥当時の埋葬法は、2 段階に分かれていた。
＊遺体を麻布にくるんで埋葬した。
＊後に、遺骨を石棺に納めた。

（2）ベタニアは、エルサレムから東に 3 kmほどの所にある。

①大勢のユダヤ人が、遺族を慰めるためにそこに来ていた。
②エルサレムからも人々が来ていた。
③ユダヤ教では、「シバ」（7 日間）という習慣があった。
④ユダヤ人は共同体によって支えられている。
⑤今でも、この習慣は生きている。
（例話）第 60 回聖地旅行での体験

2．20～22 節

Joh 11:20　マルタは、イエスが来られたと聞いて、出迎えに行った。マリアは家で座っていた。
Joh 11:21　マルタはイエスに言った。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかったでしょうに。
Joh 11:22　しかし、あなたが神にお求めになることは何でも、神があなたにお与えになることを、私は今でも知っています。」

（1）マルタとマリアは、対照的である。

①マルタは、行動的である。
②マリアは、思索的である。

(2)「**主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかったでしょうに**」

①マルタのことばは、信仰告白である。

②彼女は、イエスは癒やしの力を持っていることを信じていた。

＊これは、限定的信仰である。イエスは距離を乗り越えて奇跡を行う。

③イエスを責める意図はない。イエスに情報が届く前に、ラザロは死んだ。

④彼女は、イエスの上に神の祝福があることを信じていた。

3. 23〜24 節

Joh 11:23　イエスは彼女に言われた。「あなたの兄弟はよみがえります。」

Joh 11:24　マルタはイエスに言った。「終わりの日のよみがえりの時に、私の兄弟がよみがえることは知っています。」

(1) イエスの認識

①ラザロはすぐによみがえる。

②イエスは、マルタの信仰を引き上げようとしている。

(2) マルタの認識

①ラザロは、終わりの日によみがえる。

②彼女は、正統的なユダヤ教の終末信仰を告白している。

③イエスの力が「今ここで」働くことまでは理解していない。

4. 25〜26 節

Joh 11:25　イエスは彼女に言われた。「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。

Joh 11:26　また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことがありません。あなたは、このことを信じますか。」

(1)「わたしは、〇〇です」はイエスの神性宣言である。

①「わたしはよみがえりです。いのちです」は、第 5 の神性宣言。

(2) イエスのことばのパラドックス

①肉体の死は、永遠のいのちへの入り口である。

②イエスを信じる者は、肉体的に死んでも、霊的には永遠に生きる。

③霊的いのちは、やがて栄光の体に結びつく。

(3)「**あなたは、このことを信じますか**」

①信仰の応答を促すことばである。

5. 27 節

Joh 11:27　彼女はイエスに言った。「はい、主よ。私は、あなたが世に来られる神の子キリストであると信じております。」

(1) マルタの信仰告白（ペテロの信仰告白に匹敵する内容。マタ 16：16）

①イエスは、キリストである。

②イエスは、神の子である。

③イエスは、世に来られるお方である。

(2) マルタの信仰の限界

①ラザロがすぐによみがえるという信仰はない。

結論：今日の信者への適用

1. 遅延ではなく、完全なタイミング

(1) ヨハ 11：5～6

Joh 11:5　イエスはマルタとその姉妹とラザロを愛しておられた。

Joh 11:6　しかし、イエスはラザロが病んでいると聞いてからも、そのときいた場所に二日とどまられた。

(2) 遅延は神の無関心ではなく、信仰を成長させる神の計画である。

(3) 永遠の視点から、信仰生活を捉える。

2. 教理の理解ではなく、今ここで働く信仰

(1) ヨハ 11：24～25

Joh 11:24　マルタはイエスに言った。「終わりの日のよみがえりの時に、私の兄弟がよみがえることは知っています。」

Joh 11:25　イエスは彼女に言われた。「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。

(2) マルタは、終末の復活信仰を持っていた。

(3) しかし、イエスの内に復活のいのちがあることを理解していなかった。

(4) 試練の日に必要なのは、教理の理解ではなく、生ける信仰である。

ヨハネの福音書（33）
「ラザロの復活（2）」
ヨハ 11：28～44

1. 文脈の確認
   (1) 前書き（1：1～18）
   (2) イエスの公生涯（1：19～12：50）
      ①公生涯への序曲（1：19～51）
      ②初期ガリラヤ伝道（2：1～12）
      ③最初のエルサレム訪問（2：13～3：36）
      ④サマリア伝道（4：1～42）
      ⑤ガリラヤ伝道の再開（4：43～54）
      ⑥2 度目のエルサレム訪問（5：1～47）
      ⑦後期ガリラヤ伝道（6：1～7：9）
      ⑧3 度目のエルサレム訪問（7：10～10：42）
      ⑨公生涯の締めくくり（11～12 章）
         ＊ラザロの復活（第 7 のしるし）（11：1～44）

2. 注目すべき点
   (1) 7 つの「しるし（セーメイオン）」の中の最後で最大の「しるし」
   (2) この奇跡が公生涯の頂点で、12 章から十字架への道が始まる。
   (3) ラザロの復活（蘇生）は、「ヨナのしるし」（メシア性の証明）である。
   (4) イスラエルの指導者たちは、信仰によって応答しなければならない。

3. アウトライン
   (1) イエスと弟子たちの対話（1～16 節）
   (2) イエスとマルタの対話（17～27 節）
   (3) イエスとマリアの対話（28～32 節）
   (4) イエスとラザロの対話（33～44 節）
   （今回は、(3) と (4) を取り上げる）

4. 結論：今日の信者への適用

イエスは、死者をよみがえらせる方である。
4 種類の人たちとの会話を通して、イエスが死者をよみがえらせる方であることが分かる。

Ⅲ．イエスとマリアの対話（28～32 節）

1．28～29 節

Joh 11:28　マルタはこう言ってから、帰って行って姉妹のマリアを呼び、そっと伝えた。「先生がお見えになり、あなたを呼んでおられます。」

Joh 11:29　マリアはそれを聞くと、すぐに立ち上がって、イエスのところに行った。

（1）マルタの信仰告白（27 節）

「はい。主よ。私は、あなたが世に来られる神の子キリストであると信じております」

（2）マルタはマリアに、イエスが村の外まで来ておられることを伝えた。

①この良き知らせを、耳打ちした。公にならないように。

②普通なら、遠方から著名なラビが来ることは、栄誉と考えられていた。

2．30～31 節

Joh 11:30　イエスはまだ村に入らず、マルタが出迎えた場所におられた。

Joh 11:31　マリアとともに家にいて、彼女を慰めていたユダヤ人たちは、マリアが急いで立ち上がって出て行くのを見て、墓に泣きに行くのだろうと思い、ついて行った。

（1）イエスは、村に入っていなかった。

①弔問客たちは、マリアの後を追った。

②マリアが墓に泣きに行くのだろうと思った。

③これで、イエスによる個人教授は不可能となった。

3．32 節

Joh 11:32　マリアはイエスがおられるところに来た。そしてイエスを見ると、足もとにひれ伏して言った。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかったでしょうに。」

（1）マリアは、イエスの足もとにひれ伏した。

①ルカ 10：39 でも、似たようなことが起こっていた。

②この動作は、マリアが悲しみの中で示した自然な反応であろう。

③マリアも、マルタと同じことを言った。

「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかったでしょうに」

④それ以上は何も言わず、泣き続けた。

⑤マリアの信仰にも限界があった。

Ⅳ．イエスとラザロの対話（33～44 節）

1．33～34 節

Joh 11:33　イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのをご覧になった。

そして、霊に憤りを覚え、心を騒がせて、

Joh 11:34　「彼をどこに置きましたか」と言われた。彼らはイエスに「主よ、来てご覧ください」と言った。

（1）イエスの憤りと動揺

①マリアは、墓の前ではなく、イエスの前で泣いている。

②ユダヤ人たちの一部は、職業上泣いていたと思われる。

③イエスは、死の現実、死がもたらす悲劇や苦しみに対して怒られた。

＊罪は、一人の人の不従順によって世に入って来た。

④イエスは、死の恐怖で人々を束縛するサタンに対して憤られた。

（2）イエスは、「彼をどこに置きましたか」と尋ねた。

①もちろん、ラザロが埋葬されていることは知っておられた。

②人々の注意を喚起し、期待感を高めるためである。

③人々は丁寧にイエスを墓まで導いたが、イエスの意図は理解しなかった。

④ベタニアは、アル・エイザリヤ（ラザロの地）という名になっている。

＊ラザロ＝エレアザル

⑤ベタニアには、今も墓は存在する。

＊紀元 1 世紀の横穴式の墓。ラザロの墓だという確かな証拠はない。

＊紀元 4 世紀には、巡礼路に含まれていた。

2. 35 節

Joh 11:35　イエスは涙を流された。

（1）最も短い聖句である。

①墓に向かう途中のことであろう。

②この福音書の強調点は、イエスの神性を描くことにある。

③ここでは、イエスの人性が、その深みまで啓示されている。

＊「涙を流された」は、「ダクルオウ」という動詞である。

＊新約聖書では、この箇所だけに出て来る動詞である。

＊マリアや群衆は、声を上げて泣いていた。

＊イエスは、静かに涙を流された。

＊イエスは、マルタとマリアの悲しみに同情し、寄り添われた。

④クリスチャンが葬儀で涙を流すのは、不自然なことではない。

3. 36～37 節

Joh 11:36　ユダヤ人たちは言った。「ご覧なさい。どんなにラザロを愛しておられたことか。」

Joh 11:37　しかし、彼らのうちのある者たちは、「見えない人の目を開けたこの方も、ラザロが死なないようにすることはできなかったのか」と言った。

（1）人々の解釈

①イエスの涙は、ラザロへの愛のしるしである。

②盲人の目を開けたのだから、ラザロを死から救うこともできたであろう。

③彼らは、イエスの計画（さらに大いなる奇跡）を理解することができない。

4. 38～40 節

Joh 11:38　イエスは再び心のうちに憤りを覚えながら、墓に来られた。墓は洞穴で、石が置かれてふさがれていた。

Joh 11:39　イエスは言われた。「その石を取りのけなさい。」死んだラザロの姉妹マルタは言った。「主よ、もう臭くなっています。四日になりますから。」

Joh 11:40　イエスは彼女に言われた。「信じるなら神の栄光を見る、とあなたに言ったではありませんか。」

（1）劇的な情景

①墓は石でふさがれていたが、イエスは、「その石を取りのけなさい」と命じる。

②群衆は、その様子を見ている。

③マリアは泣いている。

④マルタは、反論する。

「主よ。もう臭くなっています。四日になりますから」(39 節)

＊ラザロは、死んだ日に埋葬された。

＊ラザロは完全に死んでおり、蘇生の可能性がないことを示している。

（2）マルタに対する権威あることば

「信じるなら神の栄光を見る、とあなたに言ったではありませんか」(40 節)

①イエスが「よみがえりであり、いのちである」ことを信じる必要がある。

②そうすれば、ラザロは復活し、神の栄光が現れる。信じる→見る。

③マルタとマリアの同意なくして、墓の石を取り除けることはできない。

5. 41～42 節

Joh 11:41　そこで、彼らは石を取りのけた。イエスは目を上げて言われた。「父よ、わたしの願いを聞いてくださったことを感謝します。

Joh 11:42　あなたはいつでもわたしの願いを聞いてくださると、わたしは知っておりましたが、周りにいる人たちのために、こう申し上げました。あなたがわたしを遣わされたことを、彼らが信じるようになるために。」

(1) 石が取りのけられた。

①人々は、何が起こるのかとイエスを注視している。

②イエスにとっては、父から遣わされたメシアであることを証明する機会である。

③もしラザロが復活しないなら、イエスの主張には根拠がないことになる。

(2) イエスは、父と子の信頼関係に基づいて祈った。

①事前に、ラザロの復活について感謝している。体験的知識に基づくものである。

②公に祈る理由は、奇跡が起こった時、自分に栄光が来ないようにするため。

③この奇跡は、イエスが父から遣わされた使者であることを証明する。

6. 43～44 節

Joh 11:43　そう言ってから、イエスは大声で叫ばれた。「ラザロよ、出て来なさい。」

Joh 11:44　すると、死んでいた人が、手と足を長い布で巻かれたまま出て来た。彼の顔は布で包まれていた。イエスは彼らに言われた。「ほどいてやって、帰らせなさい。」

(1) イエスは大声で叫ばれた。

①ラザロのためではなく、群衆にその声を聞かせるためである。

②ことばで死者を復活させた。「ラザロよ。出て来なさい」（43 節 b）

③アウグスチヌス：名前を呼ばなければ、付近の墓地から死人がすべて復活した。

(2) ラザロは、長い亜麻布で巻かれたまま出て来た。

①なぜ出て来ることができたのか。これ自体が、奇跡の価値を高めている。

②顔は布切れで包まれていた。これも、彼が死んでいたことの証拠である。

③この奇跡は、「ヨナのしるし」と呼ばれるものである。

(3) 墓石を取りのけることと、布をほどいてやることは、人間の責務である。

①しかし、最大の責務は、この奇跡に信仰的に応答することである。

②ユダヤ人たちがどのように応答したのか、次回学ぶことにする。

結論：今日の信者への適用

1. イエスは、私たちの悲しみをともにされる主である。

(1) 愛する人を亡くすことほど深い悲しみはない。

(2) イエスは、マリアや人々の涙をご覧になり、深く憤り、涙された（11：35）。

(3) 人生の悲しみの日、イエスは私たちとともにおられる。

2. イエスは、いのちの主である。

(1) 私たちの悲しみをともにされる方は、いのちの主である。

「わたしはよみがえりです。いのちです」(11：25)。

(2) その宣言は、現実の出来事として示された。

(3) ラザロの復活は、キリストにある者の復活を予表している。

3. イエスは、私たちを死の束縛から解放される。

(1) イエスは、ラザロを死の縄目から解き放ち、自由へと導かれた。

「ほどいてやって、帰らせなさい」(11：44)

(2) 罪責感、将来への恐れ、死の恐怖などの「布」に縛られてはいる人はいないか。

(3) イエスは今も、呼びかけておられる。

「出て来なさい」「ほどいてやりなさい」

ヨハネの福音書（34）
「ラザロの復活がもたらした結果」
ヨハ 11：45～57

1. 文脈の確認
   (1) 前書き（1：1～18）
   (2) イエスの公生涯（1：19～12：50）
      ①公生涯への序曲（1：19～51）
      ②初期ガリラヤ伝道（2：1～12）
      ③最初のエルサレム訪問（2：13～3：36）
      ④サマリア伝道（4：1～42）
      ⑤ガリラヤ伝道の再開（4：43～54）
      ⑥2 度目のエルサレム訪問（5：1～47）
      ⑦後期ガリラヤ伝道（6：1～7：9）
      ⑧3 度目のエルサレム訪問（7：10～10：42）
      ⑨公生涯の締めくくり（11～12 章）
         ＊ラザロの復活（第 7 のしるし）（11：1～44）
         ＊ラザロの復活がもたらした結果（11：45～57）

2. 注目すべき点
   (1)「ヨナのしるし」ということば（マタ 12：39～40）

Mat 12:39　しかし、イエスは答えられた。「悪い、姦淫の時代はしるしを求めますが、しるしは与えられません。ただし預言者ヨナのしるしは別です。

Mat 12:40　ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、地の中にいるからです。

   (2)「ヨナのしるし」は、3 つある。
      ①ラザロの復活
      ②イエス自身の復活
      ③2 人の証人の復活（黙 11 章）

3. アウトライン
   (1) 信じたユダヤ人たち（45 節）
   (2) パリサイ人に報告したユダヤ人たち（46 節）
   (3) 祭司長とパリサイ人たち（47～48 節）
   (4) 大祭司カヤパ（49～53 節）
   (5) イエス（54～57 節）

4. 結論：今日の信者への適用

ラザロの復活は、さまざまな結果をもたらした。
それらの結果を学ぶことで、正しい応答をすることができるようになる。

Ⅰ．信じたユダヤ人たち（45 節）

1. 45 節

Joh 11:45　マリアのところに来ていて、イエスがなさったことを見たユダヤ人の多くが、イエスを信じた。

(1) イエスの自己啓示は、常に 2 つの反応を引き起こす。
①信仰と不信仰である。
②イエスは分裂をもたらすために来られたと言える。

(2) ラザロの復活は、メシア的奇跡（ヨナのしるし）である。
①ラザロの復活を目撃した多くの者が、イエスはメシアであると信じた。
②偏見なしにこの「しるし」（証拠）を検証すれば、当然信仰に導かれる。
③幼子のような信仰を神は祝福される。
④深い思索と幼子のような単純な信仰は、両立する。

Ⅱ．パリサイ人に報告したユダヤ人たち（46 節）

1. 46 節

Joh 11:46　しかし、何人かはパリサイ人たちのところに行って、イエスがなさったことを伝えた。

(1)「しかし」は、それとは対照的な反応を示した人々がいたことを示している。
①何人かのユダヤ人たちはエルサレムに戻り、パリサイ人たちに報告した。
②彼らは、ヨナのしるしを目撃しながらも、イエスをメシアと認めなかった。
③彼らは、早く対応策を講じる必要があると判断した。

Ⅲ．祭司長とパリサイ人たち（47〜48 節）

1. 47 節

Joh 11:47　祭司長たちとパリサイ人たちは最高法院を召集して言った。「われわれは何をしているのか。あの者が多くのしるしを行っているというのに。

(1) 祭司長とパリサイ人たちは、議会を召集した。
①最高法院とは、サンヘドリンのことである。
②議長、副議長、69 人の議員、合計 71 人。

②急きょ召集したようなので、人数は不足していたと思われる。

(2)「**われわれは何をしているのか**」

①なぜこの男の活動を阻止できないのか。

②なぜ行動に移すのが遅いのか。

③この箇所から、役割分担が決まる。

＊祭司長たち（サドカイ派）がイエス殺害の主導権を握る。

＊パリサイ派がそれを支持する。

(3)「**あの者が多くのしるしを行っているというのに**」

①彼らは、イエスが「しるし」を行っていることを認めている。

②その中には、ラザロの復活も含まれる。

③「しるし」を否定しなかった理由がある。

＊公に行われている。

＊数が多い。

＊目撃情報が多い。

2. 48 節

Joh 11:48　あの者をこのまま放っておけば、すべての人があの者を信じるようになる。そうなると、ローマ人がやって来て、われわれの土地も国民も取り上げてしまうだろう。」

(1) 彼らがこの状況を恐れた理由

①このまま放置すれば、イエスをメシアと信じる人が多く出る。

②彼らは、イエスを王として擁立するだろう。

③そうなると、ローマが介入してくるだろう。

④「**土地**」（トポス）とは何か。

＊狭義の意味は、神殿である。

＊広義の意味は、神殿を中心としたユダヤ人の生活空間である。

⑤祭司長たちの優先順位は、職場（神殿）、そして、国民である。

IV. 大祭司カヤパ（49～53 節）

1. 49～50 節

Joh 11:49　しかし、彼らのうちの一人で、その年の大祭司であったカヤパが、彼らに言った。「あなたがたは何も分かっていない。

Joh 11:50　一人の人が民に代わって死んで、国民全体が滅びないですむほうが、自分たちにとって得策だということを、考えてもいない。」

(1)「**その年の大祭司であったカヤパ**」

①大祭司は生涯その職責に就くというのが、聖書の教えである。

②しかしローマは、大祭司が巨大な権力を握ることを恐れた。

③そのため、都合のよい時に、都合のよい人物を大祭司に任命した。

④カヤパは、紀元 18～36 年に大祭司であった（18 年間）。

⑤彼は、親ローマで、イエスや使徒たちに敵対する勢力の中心にいた。

(2)「**あなたがたは何も分かっていない**」

①その通りである。イエスに関する解決策はまだ出されていない。

②これは、軽蔑のことばである。

③これは、ヨハネによるアイロニー（皮肉）でもある。

(3) 大祭司カヤパは、解決策を提案した。

①イエスを放置すれば、ローマ軍によって国民全体が滅ぼされることになる。

②一人の人が民に代わって死ねば、国民全体は滅びないので、得策である。

③イエスが人として来られた目的は、まさに「民に代わって死ぬ」ことである。

④カヤパは、イエスが来られた目的を理解しないままで、それを口にしている。

2. 51～52 節

Joh 11:51　このことは、彼が自分から言ったのではなかった。彼はその年の大祭司であったので、イエスが国民のために死のうとしておられること、

Joh 11:52　また、ただ国民のためだけでなく、散らされている神の子らを一つに集めるためにも死のうとしておられることを、預言したのである。

(1) この節は、ヨハネによるアイロニー（皮肉）である。

①カヤパは意図していないが、預言してしまっている。

②大祭司という職責のゆえに、神は彼に預言を与えたのである。

(2)「**散らされている神の子らを一つに集める**」

①「**散らされている神の子ら**」とは、異邦人信者のことである。

②カヤパはユダヤ人のためにと考えていたが、イエスの死は、異邦人をも救う。

③イエスの死は、新しい時代をもたらす。それが教会時代である。

④イエスの死は、人間の悪意による死ではなく、神の愛と計画による死である。

3. 53 節

Joh 11:53　その日以来、彼らはイエスを殺そうと企んだ。

(1) 第一のヨナのしるしは、神の意図とは異なる結果をもたらした。

①サドカイ人とパリサイ人たちは、第一のヨナのしるしに応答しなかった。

②それどころか、彼らはイエスに対してより敵対的になった。

③イエス殺害の陰謀が、その日から現実化した。

V．イエス（54～57 節）

1. 54 節

Joh 11:54　そのために、イエスはもはやユダヤ人たちの間を公然と歩くことをせず、そこから荒野に近い地方に去って、エフライムという町に入り、弟子たちとともにそこに滞在された。

(1) イエスの時は、まだ来ていない。

①イエスはユダヤを去り、エフライムという町に入られた。

②ベタニヤの北約 25km に位置する町であろう。

③ユダの荒野に近い地方。危険が迫れば逃げることができる。

④次にイエスがユダヤに入るのは、十字架にかかる時である。

2. 55～56 節

Joh 11:55　さて、ユダヤ人の過越の祭りが近づいた。多くの人々が、身を清めるため、過越の祭りの前に地方からエルサレムに上って来た。

Joh 11:56　彼らはイエスを捜し、宮の中に立って互いに話していた。「どう思うか。あの方は祭りに来られないのだろうか。」

(1) 多くの人々が、過越の祭りの前にエルサレムに上って来た。

①儀式的に汚れた人は、自らを清める必要があった（民 9：6～13）。

②それ以外にも、自発的に清めの儀式を行う人もいた。

③イエスの贖いの死によって「真の清め」が与えられることの伏線になっている。

(2) 祭りが始まる前から、人々の関心はイエスに集中していた。

①彼らは、イエスを捜した。

②過越の祭りの中心にいるべきお方が、「指名手配犯」のようになっていた。

③12 章に入ると、イエスはエルサレムに登場する。

3. 57 節

Joh 11:57　祭司長たち、パリサイ人たちはイエスを捕らえるために、イエスがどこにいるかを知っている者は報告するように、という命令を出していた。

(1) パリサイ人とサドカイ人が、イエスを捕らえるという一点で共闘している。

①民衆に対する情報提供の要請がなされた。

②イエスに対する敵意が公的政策となった。
③この政策は、死刑を前提とした陰謀である。

(2) 情報提供の要請は、ユダの裏切り（13 章）の複線になっている。
①イエスを裏切り、逮捕し、法廷に引き渡すことの中に、人の罪の深さを見る。

結論：今日の信者への適用

1. 信仰と不信仰は、事実に対する心の態度で決まる。
(1) 同じ事実（ラザロの復活）を目撃しながら、人々は二分された。
①信じた人たち vs.パリサイ人のところに行った人たち
(2) 信仰の最大の妨げは、道徳的堕落である。
①人は、「信じたくない」から「信じない」のである。
②また、「信じると都合が悪くなる」から「信じない」のである。
③罪人は、心の入り口に「墓石」を置いた状態にいる。
(3) 信仰の分水嶺を迎えたとき、正しい選びをしなければ救いから遠ざかる。
①福音を受け入れることは、霊的選択である。

2. 神は、人間の陰謀すらも用いる。
(1) カヤパは、民を救うためにイエス殺害の陰謀を提案した。
①彼の発言は、政治的意図から出たものであった。
②彼は自分でも理解しないままで、イエスの死を預言した。
(2) 神は、愛のゆえにイエスを十字架につける。
①神は、状況を支配している。
②人間の罪深い動機すらも、神の主権によって計画に取り入れられる。

3. イエスに従うとは、苦難の道を歩むことである。
(1) イエスの居場所を知らせるようとの命令が出されていた（57 節）。
①このときイエスは、十字架への道を歩んでいた。
②受難の道は、神の計画に従う道でもあった。
(2) 信者は、イエスに従う。
①この福音書の読者たちは、信仰の犠牲を払っていた。
②イエスに従う道は、苦難の道であるが、いのちに至る道でもある。

ヨハネの福音書（35）
「マリアによる油注ぎ」
ヨハ 12：1～11

1. 文脈の確認
   (1) 前書き（1：1～18）
   (2) イエスの公生涯（1：19～12：50）
      ①公生涯への序曲（1：19～51）
      ②初期ガリラヤ伝道（2：1～12）
      ③最初のエルサレム訪問（2：13～3：36）
      ④サマリア伝道（4：1～42）
      ⑤ガリラヤ伝道の再開（4：43～54）
      ⑥2 度目のエルサレム訪問（5：1～47）
      ⑦後期ガリラヤ伝道（6：1～7：9）
      ⑧3 度目のエルサレム訪問（7：10～10：42）
      ⑨公生涯の締めくくり（11～12 章）
         ＊ラザロの復活（第 7 のしるし）（11：1～44）
         ＊ラザロの復活がもたらした結果（11：45～57）
         ＊マリアによる油注ぎ（12：1～11）

2. 注目すべき点
   (1) 時は、過越の祭りの 6 日前。
   (2) 場所は、ベタニアのとある家。
   (3) 場面は、穏やかな食卓の場。
   (4) そこに、死の影、深い愛、表面的な判断などが併存。

3. アウトライン
   (1) マリアの判断（1～3 節）
   (2) ユダの判断（4～6 節）
   (3) イエスの判断（7～8 節）
   (4) ラザロの危機（9～11 節）

4. 結論：今日の信者への適用

私たちも、真の礼拝者になることができる。
3 人の判断から教訓を学ぶことによって、真の礼拝者になることができる。

Ⅰ．マリアの判断（1～3 節）

1．1 節

Joh 12:1　さて、イエスは過越の祭りの六日前にベタニアに来られた。そこには、イエスが死人の中からよみがえらせたラザロがいた。

(1) レビ記 23 章にイスラエルの祭りに関する規定がある。

①春の祭り（初臨の予表）

＊過越の祭り：贖いの死

＊種なしパンの祭り：罪の清め

＊初穂の祭り：復活

＊七週の祭り（五旬節）：聖霊降臨

②秋の祭り（再臨の予表）

＊ラッパの祭り：携挙

＊贖罪の日：患難期

＊仮庵の祭り：千年王国

(2)「**過越の祭りの六日前にベタニアに来られた**」

①ヨハネは、イエスが死を決意していることを伝えている。

②時が迫っている。

③距離が近づいている。

(3)「**そこには、イエスが死人の中からよみがえらせたラザロがいた**」

①ラザロの存在は、イエスがこれから歩もうとする道を予表している。

②死、埋葬、復活

2．2 節

Joh 12:2　人々はイエスのために、そこに夕食を用意した。マルタは給仕し、ラザロは、イエスとともに食卓に着いていた人たちの中にいた。

(1) ここは、ツァラアトに冒された人シモンの家である（マタ 26：6）。

①恐らく、イエスによって癒された人であろう。

②今も病んでいるなら、村には住めない。

③ましてや、多数の人との会食などは許されないことである。

(2) マルタは、給仕していた。

①マルタは信仰の人である（ヨハ 11：27 の信仰告白）。

②と同時に、奉仕の人でもある（ルカ 10：38～42）。
③マルタを正しく評価する必要がある。

(3) ラザロは、食卓に着いていた人々の中にいた。
①復活の証人としてのラザロの存在は、ユダヤ人を 2 分する要因になっている。

3. 3 節

Joh 12:3　一方マリアは、純粋で非常に高価なナルドの香油を一リトラ取って、イエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐった。家は香油の香りでいっぱいになった。

(1) これは、マリアの深い礼拝と献身の物語である。
①純粋で高価なナルドの香油
＊純粋とは、混ぜ物がないということである。
②香油 300 g
＊その価値は、300 デナリ（年収）以上であった。
＊イエスの「いのちの価値」を知っているので、惜しくはない。
③イエスの足に塗った。
＊マタイ（26:7）やマルコ（14:3）は、「頭」と記している。
④自分の髪でぬぐった。
＊ユダヤ人女性にとっては、髪は女性の誉れである。
＊髪で足をぬぐう行為も、極めて異例で、徹底した自己放棄の象徴である。

(2) 家は香油の香りでいっぱいになった。
①目撃者の情報
②これは、単なる物理的描写ではない。
③霊的な香り（神への献身と礼拝）が満ちたことを示唆している。

II．ユダの判断（4～6 節）

1. 4～5 節

Joh 12:4　弟子の一人で、イエスを裏切ろうとしていたイスカリオテのユダが言った。
Joh 12:5　「どうして、この香油を三百デナリで売って、貧しい人々に施さなかったのか。」

(1) イスカリオテのユダは不満を口にした。
①マタ 26：8～9

Mat 26:8　弟子たちはこれを見て、憤慨して言った。「何のために、こんな無駄なことをするのか。
Mat 26:9　この香油なら高く売れて、貧しい人たちに施しができたのに。」

②弟子たちも憤慨したが、彼らの動機は純粋なものだった。

③ユダの動機は、汚れていた。

＊彼は、イエスを裏切ろうとしていた。

＊それゆえヨハネは、イスカリオテのユダだけを取り上げている。

2. 6 節

Joh 12:6　彼がこう言ったのは、貧しい人々のことを心にかけていたからではなく、彼が盗人で、金入れを預かりながら、そこに入っているものを盗んでいたからであった。

(1) ユダの動機は、汚れていた。

①彼は、金入れから預かったものを盗んでいた。

②この香油も、売れば金になると考えた。

(2) ユダは避けるべき手本である。

Ⅲ. イエスの判断（7〜8 節）

1. 7 節

Joh 12:7　イエスは言われた。「そのままさせておきなさい。マリアは、わたしの葬りの日のために、それを取っておいたのです。

(1) イエスは、マリアがなぜ香油を注いだのかを知っておられた。

①マタ 26：12

Mat 26:12　この人はこの香油をわたしのからだに注いで、わたしを埋葬する備えをしてくれたのです。

②これは、埋葬の備えであった。

(2)「**それを取っておいた**」

①マリアは、イエスの死の時が近いことを理解していた。

②イエスの話に耳を傾けた成果である。

③マリアの行為には、霊的意義がある。

④女性であるマリアが、弟子たちよりも敏感に十字架の意味を受け取っていた。

2. 8 節

Joh 12:8　貧しい人々は、いつもあなたがたと一緒にいますが、わたしはいつも一緒にいるわけではありません。」

(1) 善行にも優先順位と時の識別がある。

①弟子たちには、これからも貧しい人々に仕えるチャンスがある。

②イエスの埋葬の用意ができるのは、この時だけである。

＊イエスの死後、数名の婦人たちが墓に行ってイエスを埋葬しようとした。

＊しかし、それは実現せず、彼女たちは復活のイエスに出会って驚いた。

(2) 霊的識別力のある者は、世の価値観と異なる判断を下す。

①私たちは、主イエスを第一とする生活を送るべきである。

Ⅳ．ラザロの危機（9～11 節）

1．9 節

Joh 12:9　すると、大勢のユダヤ人の群衆が、そこにイエスがおられると知って、やって来た。イエスに会うためだけではなく、イエスが死人の中からよみがえらせたラザロを見るためでもあった。

(1) 大勢のユダヤ人の群衆が、その家にやって来た。

①イエスがおられると知って、イエスに会うためにやって来た。

②よみがえったラザロを見るためでもあった。

③信仰と好奇心が混在していた。

(2) ラザロは、奇跡の証人となっていた。

①これは宗教的指導者たちには、不都合な真実であった。

2．10～11 節

Joh 12:10　祭司長たちはラザロも殺そうと相談した。

Joh 12:11　彼のために多くのユダヤ人が去って行き、イエスを信じるようになったからである。

(1) ラザロ抹殺の陰謀

①祭司長たちは、真理よりも自己保身を重視した。

②神の御業を否定しようとするのは、極めて深刻な霊的堕落を示している。

(2) ラザロの影響力

①ラザロは復活を証言し、多くのユダヤ人を救いに導いた。

②「**去って行き**」は、祭司長たち/パリサイ人たちの影響から離れたということ。

③宗教的エリートたちは、人の救いよりも既得権益を守ることを選んだ。

結論：今日の信者への適用

1．全的献身を実行する。

（1）マリアは、貴重な香油（約 300 デナリ＝年収相当）をイエスに注いだ。
（2）時間・労力・富・賜物などを、主のために惜しまず用いよう。

2. イエスの価値を正しく認識する。
（1）マリアは、イエスの「いのちの価値」を知っていた。
（2）ユダは、イエスの価値を過小評価し、「もったいない」と判断した。
（3）イエスの価値にふさわしい応答をしよう。

3. 他人の評価よりも神の評価を重んじる。
（1）「貧しい人に与えるべきでは」は、他人の評価である。
（2）イエスは、マリアの行動を称賛された。
（3）「世界中で語り継がれる」（マタ 26：13）と言われた。
（4）神の評価を重んじる選びをしよう。

4. 今しかできないことを実行する。
（1）「わたしはいつも一緒にいるわけではありません」（12：8）
（2）礼拝には、「今この時」という「機会の瞬間」がある。
（3）今という時を生かす信仰の歩みをしよう。

ヨハネの福音書（36）
「エルサレム入城」
ヨハ 12：12〜19

1. 文脈の確認
   (1) 前書き（1：1〜18）
   (2) イエスの公生涯（1：19〜12：50）
      ①公生涯への序曲（1：19〜51）
      ②初期ガリラヤ伝道（2：1〜12）
      ③最初のエルサレム訪問（2：13〜3：36）
      ④サマリア伝道（4：1〜42）
      ⑤ガリラヤ伝道の再開（4：43〜54）
      ⑥2 度目のエルサレム訪問（5：1〜47）
      ⑦後期ガリラヤ伝道（6：1〜7：9）
      ⑧3 度目のエルサレム訪問（7：10〜10：42）
      ⑨公生涯の締めくくり（11〜12 章）
         ＊ラザロの復活（第 7 のしるし）（11：1〜44）
         ＊ラザロの復活がもたらした結果（11：45〜57）
         ＊マリアによる油注ぎ（12：1〜11）
         ＊エルサレム入城（12：12〜19）

2. 注目すべき点
   (1)「時」が満ちた瞬間
   (2) 公生涯のクライマックスと十字架への道の始まり
   (3) 人々の期待と神の計画のズレ
   (4) 弟子たちの無理解
   (5) 群衆の熱狂と指導者たちの危機感

3. アウトライン
   (1) イエスを歓迎する群衆（12〜13 節）
   (2) ろばの子に乗るイエス（14〜15 節）
   (3) 無理解な弟子たち（16 節）
   (4) 熱狂する群衆（17〜18 節）
   (5) 危機感を抱くパリサイ人たち（19 節）

4. 結論：今日の信者への適用

私たちは、神の御心を理解する者となることができる。

誤解の理由を知ることによって、神の御心を理解する者となることができる。

Ⅰ．イエスを歓迎する群衆（12〜13 節）

1．12〜13 節

Joh 12:12　その翌日、祭りに来ていた大勢の群衆は、イエスがエルサレムに来られると聞いて、

Joh 12:13　なつめ椰子の枝を持って迎えに出て行き、こう叫んだ。／「ホサナ。／祝福あれ、主の御名によって来られる方に。／イスラエルの王に。」

(1)「**その翌日**」

①この日は、棕櫚の聖日と呼ばれる。

②マリアの献身の場面の直後のことである。

③イエスは、ベタニアからエルサレムに向かわれた。

④「勝利の入城」と呼ばれるが、実際は「過越の子羊の選別」である。

(2) 祭りに来ていた大勢の群衆は、イエスを歓迎した。

①「**なつめ椰子の枝を持って**」

②「**ホサナ。祝福あれ、主の御名によって来られる方に。イスラエルの王に**」

＊「**ホサナ**」とは、「どうか救ってください」という意味である。

＊元々は嘆願のことばであるが、ここではメシア到来の歓呼に変わっている。

＊詩 118：25〜26 を引用し、イエスを「政治的メシア」として歓迎している。

(3) 彼らは、エルサレム入城の意味を誤解していた。

①なつめ椰子の枝を振るのも、祈りのことばも、仮庵の祭りの習慣である。

②「過越の子羊」としてではなく、「政治的メシア」としてイエスを迎えた。

③しかし、仮庵の祭りの前に、過越の祭りが来なければならない。

④初臨のメシアは「受難のしもべ」、再臨のメシアは「神の国の王」である。

⑤イエスは、ろばの子に乗ることによって、その誤解を解こうとした。

⑥しかし、イエスの意図は、その時には理解されなかった。

Ⅱ．ろばの子に乗るイエス（14〜15 節）

1．14〜15 節

Joh 12:14　イエスはろばの子を見つけて、それに乗られた。次のように書かれているとおりである。

Joh 12:15　「恐れるな、娘シオン。／見よ、あなたの王が来られる。／ろばの子に乗って。」

(1) イエスの自己宣言

①当時、ろばは平和の象徴であった。

②王は出陣に際して馬に乗ったが、平和な時はろばに乗るのが慣例であった。

③1 列 1：33 で、ソロモンは、ろばに乗って王位を継承した。

1Ki 1:33　王は彼らに言った。「おまえたちの主君の家来たちを連れて、私の子ソロモンを私の雌ろばに乗せ、彼を連れてギホンへ下れ。

④イエスは、自分が「平和をもたらすメシア」であることを宣言した。

(2) メシア預言の成就

①ゼカ 9：9 の成就

Zec 9:9　娘シオンよ、大いに喜べ。／娘エルサレムよ、喜び叫べ。／見よ、あなたの王があなたのところに来る。／義なる者で、勝利を得、／柔和な者で、ろばに乗って。／雌ろばの子である、ろばに乗って。

②イエスは、この預言が成就するように、意図的に行動した。

③共観福音書では、弟子たちがろばを手配する場面が詳しく描かれている。

④ヨハネは、手続きの詳細を省略している。

⑤ヨハネは、イエスの主権的行動と、預言成就の意義に焦点を合わせている。

(3) イエスの決意

①群衆の期待に応えるのではない。

②神の計画に忠実に歩むことを選ぶ。

③神のしもべは、イエスの献身から教訓を学ぶことができる。

Ⅲ．無理解な弟子たち（16 節）

1．16 節

Joh 12:16　これらのことは、初め弟子たちには分からなかった。しかし、イエスが栄光を受けられた後、これがイエスについて書かれていたことで、それを人々がイエスに行ったのだと、彼らは思い起こした。

(1) イエスの入城時、弟子たちも状況を理解していなかった。

①ヨハネもその中の一人であった。

②ゼカ 9：9 の預言の成就だと分かったのは、後のことであった。

③「**イエスが栄光を受けられた後**」

＊十字架、復活、昇天の出来事の後、聖霊によって理解した。

④「**それを人々がイエスに行ったのだと、彼らは思い起こした**」

＊「**人々**」とは「弟子たち」のことである。

＊自分たちもイエスを栄光の王として歓迎したことを思い起こした。

＊そのことは、ゼカ 9：9 の預言と合致していると理解した。

(2) 神のご計画は、その時には理解できなくても、後になって分かる。

①分からなくても、疑ってはならない。

Ⅳ．熱狂する群衆（17〜18 節）

1．17〜18 節

Joh 12:17　さて、イエスがラザロを墓から呼び出して、死人の中からよみがえらせたときにイエスと一緒にいた群衆は、そのことを証しし続けていた。

Joh 12:18　群衆がイエスを出迎えたのは、イエスがこのしるしを行われたことを聞いたからであった。

(1) ラザロの復活を目撃した群衆

①イエスが行われたしるしを、証しし続けていた。

②つまり、イエスはメシアかもしれないという期待感をばら撒いていたのである。

(2) この証言がエルサレム中に広まり、多くの群衆がイエスを出迎えた。

①彼らの信仰は、「しるし」に惹かれた信仰である。

②イエスが意図している十字架と復活を理解した信仰ではない。

Ⅴ．危機感を抱くパリサイ人たち（19 節）

1．19 節

Joh 12:19　それで、パリサイ人たちは互いに言った。「見てみなさい。何一つうまくいっていない。見なさい。世はこぞってあの人の後について行ってしまった。」

(1) パリサイ人たちの危機感

①何一つうまくいっていない。

②世はこぞってあの人の後について行ってしまった。

③イエス殺害の陰謀が失敗しかけていると感じた瞬間である。

④パリサイ人たちのことばの中にアイロニー（皮肉）がある。

＊イエスは、全世界に救いをもたらすお方である。

結論：今日の信者への適用

1．自分の思い込みを捨てて、聖書に向かう。

(1) 群衆は、自分中心の期待でイエスを迎えた。

(2)「政治的メシア」として迎えたが、イエスの真の目的を理解していなかった。

(3) 神との「主従関係」が逆転すると、御心が読めなくなる。

（4）神の計画は、常に前進し続けている。

2. 聖霊に導かれて、聖書を読む。

（1）弟子たちは、イエスの十字架と復活と昇天後に、聖書を理解した。

（2）これは、聖霊が与えられた結果である。

（3）ヨハネは、かつては分からなかったことが分かるようになったと証言する。

（4）未信者の目には、霊的覆いが掛かっている。

（5）2 コリ 3：16〜17

2Co 3:16　しかし、人が主に立ち返るなら、いつでもその覆いは除かれます。

2Co 3:17　主は御霊です。そして、主の御霊がおられるところには自由があります。

（6）御霊は、聖書を理解する力と、自由の子として生きる力を与えてくれる。

3. 御心が見えなくても、神に信頼し続ける。

（1）神のなさることは、すぐには分からないことが多い。

（2）その場合に必要なのは、忍耐である。

（3）すでに分かっていることに従って従順に歩むべきである。

4. 信仰者たちの体験から学ぶ。

（1）ヨセフの生涯（創世記）

（2）モーセの荒野の 40 年（出エジプト記）

（3）弟子たちとイエスの十字架（福音書）

ヨハネの福音書（37）
「一粒の麦が死ぬとき」
ヨハ 12：20〜36

1. 文脈の確認
   (1) 前書き（1：1〜18）
   (2) イエスの公生涯（1：19〜12：50）
      ①公生涯への序曲（1：19〜51）
      ②初期ガリラヤ伝道（2：1〜12）
      ③最初のエルサレム訪問（2：13〜3：36）
      ④サマリア伝道（4：1〜42）
      ⑤ガリラヤ伝道の再開（4：43〜54）
      ⑥2 度目のエルサレム訪問（5：1〜47）
      ⑦後期ガリラヤ伝道（6：1〜7：9）
      ⑧3 度目のエルサレム訪問（7：10〜10：42）
      ⑨公生涯の締めくくり（11〜12 章）
         ＊ラザロの復活（第 7 のしるし）（11：1〜44）
         ＊ラザロの復活がもたらした結果（11：45〜57）
         ＊マリアによる油注ぎ（12：1〜11）
         ＊エルサレム入城（12：12〜19）
         ＊一粒の麦が死ぬとき（12：20〜36）

2. 注目すべき点
   (1) 過越の祭りの直前、十字架の「時」が間近に迫っている。
   (2) ギリシア人（異邦人）が登場する。
   (3) 一粒の麦のたとえが語られる。

3. アウトライン
   (1) ギリシア人の願い（20〜22 節）
   (2) イエスの回答（23〜26 節）
   (3) イエスの祈り（27〜29 節）
   (4) 群衆との対話（30〜36 節）

4. 結論：今日の信者への適用

「一粒の麦のたとえ」から、霊的教訓を学ぶ。

Ⅰ．ギリシア人の願い（20～22 節）

1. 20 節

Joh 12:20　さて、祭りで礼拝のために上って来た人々の中に、ギリシア人が何人かいた。

（1）過越の祭りは、3 大巡礼祭の一つである。

①ユダヤ人の男性は、エルサレムに上ってこの祭りを祝うように命じられていた。

②ここに登場するのは、神を敬う異邦人か、ユダヤ教に改宗した異邦人である。

③彼らは、キリストを通して神を礼拝するようになる異邦人の象徴である。

2. 21～22 節

Joh 12:21　この人たちは、ガリラヤのベツサイダ出身のピリポのところに来て、「お願いします。イエスにお目にかかりたいのです」と頼んだ。

Joh 12:22　ピリポは行ってアンデレに話し、アンデレとピリポは行って、イエスに話した。

（1）そのギリシア人たちが、イエスとの面会を希望した。

①彼らは、ピリポに仲介を依頼した。

②ピリポを「キュリオス」と呼んでいる。非常に丁寧な言い方である。

③ピリポはベツサイダ出身で、ギリシア名（馬を愛する者）を持つ唯一の使徒。

④「**イエスにお目にかかりたいのです**」

＊これは、イエスに近づきたいという、深い霊的求めの表現である。

（例話）講壇の裏側に、このみことばが置かれている教会

⑤ギリシア人の求めは、全世界への救いの伝達が始まることの象徴である。

（2）ピリポはアンデレに相談し、2 人でイエスのもとに行った。

①ピリポは、不安だったのだろう。

＊これまでイエスは、異邦人伝道に消極的であった。

②それで、話し易いアンデレに相談したのであろう。

③イエスは、この情報によって時が近いことを実感した。

（3）ギリシア人たちは、直接イエスのところに行けなかったのであろう。

①神を敬う異邦人は、異邦人の庭までしか立ち入れない。

②改宗者の異邦人は、婦人の庭まで入れた。

③異邦人の庭とその先の庭の間には、隔ての壁が置かれていた。

＊それを超えて行くことは、死罪に当たる。

＊その隔ての壁（中垣）は、十字架によって取り去られた（エペ 2：14～16）。

＊その結果、ユダヤ人と異邦人は「新しいひとりの人」となった。

Ⅱ．イエスの回答（23〜26 節）

1. 23〜24 節

Joh 12:23　すると、イエスは彼らに答えられた。「人の子が栄光を受ける時が来ました。

Joh 12:24　まことに、まことに、あなたがたに言います。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。しかし、死ぬなら、豊かな実を結びます。

(1) イエスは、その申し出には答えていないように見えるが、そうではない。

①イエスは、「死と復活のプログラム」について預言的に語っている。

(2)「**人の子が栄光を受ける時が来ました**」

①「人の子」は、メシアの称号（ダニ 7：13）。

②「**栄光を受ける時**」とは、十字架の時である（十字架の死、復活、昇天）。

③ほとんどの人たちにとって、死とは屈辱の体験である。

④イエスにとっては、十字架の死は栄光に至る門である。

(3)「**まことに、まことに、あなたがたに言います**」

①厳粛な教えや宣言の前に言う定型句である。

②「アーメン、アーメン」

(4) 一粒の麦のたとえ：逆転の原理

①一粒の麦が地に落ちてしななければ、それは一粒のままで残る。

②もし死ねば、豊かな実を結ぶ。

③もしイエスが死ななければ、彼一人が栄光の座に着く。

④死ねば、その死と復活を通して、多くの新しいいのちが生まれるようになる。

⑤その中には、異邦人信者も多く含まれている。

2. 25〜26 節

Joh 12:25　自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世で自分のいのちを憎む者は、それを保って永遠のいのちに至ります。

Joh 12:26　わたしに仕えるというのなら、その人はわたしについて来なさい。わたしがいるところに、わたしに仕える者もいることになります。わたしに仕えるなら、父はその人を重んじてくださいます。」

(1) 一粒の麦から導き出される一般原則

①ユダヤ的には、「愛する」「憎む」とは、優先順位の問題である。

②多くの人たちは、自己中心的な人生を送っている。

③その結果、霊的いのちを失っている。

④しかし、霊的いのちを優先させる者は、永遠のいのちに至る。

(2) 弟子たちへの適用

①霊的いのちを優先させるとは、主イエスに仕えることである。

②イエスに従って自己犠牲の道を歩む者に祝福が約束されている。

③これは、より豊かな実をつけるために、自我に死ぬという原則である。

＊伝道の実

＊人格の実

④しかし、自己犠牲の道は、容易なことではない。

⑤イエスは次の祈りによって、ご自身の心の中を見せる。

Ⅲ．イエスの祈り（27～29 節）

1．27～28 節 a

Joh 12:27　「今わたしの心は騒いでいる。何と言おうか。『父よ、この時からわたしをお救いください』と言おうか。いや、このためにこそ、わたしはこの時に至ったのだ。

Joh 12:28　父よ、御名の栄光を現してください。」すると、天から声が聞こえた。「わたしはすでに栄光を現した。わたしは再び栄光を現そう。」

(1)「**今わたしの心は騒いでいる**」

①人としてのイエスの苦悩が表現されている。

②自然な思いとしては、苦難と辱めの死を避けたい。

③しかし、「**父よ。この時からわたしをお救いください**」とは言わない。

④「**いや。このためにこそ、わたしはこの時に至ったのだ**」

＊メシアとしてのイエスの従順と献身を表したものである。

⑥「**父よ。御名の栄光を現してください**」と祈られた。

(2) 天からの声とは何か。

①これをバット・コルという。

＊洗礼の時（マタ 3：17）

＊変貌山において（マタ 17：5）

＊一粒の麦の話に続いて（ヨハ 12：28）

②「**わたしはすでに栄光を現した**」

＊イエスの地上生涯において、神の栄光は現れた。

＊イエスが行った種々の癒しと奇跡

③「**わたしは再び栄光を現そう**」

＊死、埋葬、復活、昇天を通して、さらに大いなる栄光が現れる。

④この超自然的な声は、人々にイエスに関する真理を教えるためのものであった。
⑤しかし、その意味を理解した者はいなかった。

2. 29 節

Joh 12:29　そばに立っていてそれを聞いた群衆は、「雷が鳴ったのだ」と言った。ほかの人々は、「御使いがあの方に話しかけたのだ」と言った。

(1) そばに立っていた群衆の反応
①雷が鳴った。単なる自然現象。
②天使がイエスに話しかけた。イエス個人への啓示。

Ⅳ. 群衆との対話（30〜36 節）

1. 30〜32 節

Joh 12:30　イエスは答えられた。「この声が聞こえたのは、わたしのためではなく、あなたがたのためです。
Joh 12:31　今、この世に対するさばきが行われ、今、この世を支配する者が追い出されます。
Joh 12:32　わたしが地上から上げられるとき、わたしはすべての人を自分のもとに引き寄せます。」

(1) イエスの招きのことば
①天からの声が聞こえたのは、その場にいた群衆のためである。
②イエス自身は、その声を必要としていない。

(2)「**今、この世のさばきが行われ、**」
①この世は、イエスのメシア性を拒否し、イエスを十字架につけようとしている。
②その不信仰のゆえに、この世（神に背く秩序）は裁かれる。

(3)「**今、この世を支配する者が追い出されます**」
①イエスの死は人類の救いとサタンに対する勝利をもたらした。
②サタンはその権威を失う。
＊判決は確定したが、その執行はまだ途上にある。
＊最終的には、火の池に投げ込まれる（黙 20：10）。

(4)「**わたしが地上から上げられるとき、わたしはすべての人を自分のもとに引き寄せます**」
①「地上から上げられる」とは、十字架の死のことである（イザ 52：13 参照）。
＊イエスは、ご自分がどのような死に方をするか知っていた。

②その後、すべての人がイエスのもとに引き寄せられる。

＊これは、すべての民族に救いが提供されるという意味である。

＊これは、ギリシア人の願いに対する回答である。

2. 33 節

Joh 12:33　これは、ご自分がどのような死に方で死ぬことになるかを示して、言われたのである。

(1)「地上から上げられる」の意味を理解できなかった読者のための説明である。

2. 34 節

Joh 12:34　そこで、群衆はイエスに答えた。「私たちは律法によって、キリストはいつまでも生きると聞きましたが、あなたはどうして、人の子は上げられなければならないと言われるのですか。その人の子とはだれですか。」

(1) 群衆にはイエスの語った内容が理解できない。

①彼らは、メシアは死なないと教えられていた（イザ 9：6〜7、ダニ 7：14）。

②彼らは、受難のしもべと栄光の王の区別ができていなかった。

3. 35〜36 節

Joh 12:35　そこで、イエスは彼らに言われた。「もうしばらく、光はあなたがたの間にあります。闇があなたがたを襲うことがないように、あなたがたは光があるうちに歩きなさい。闇の中を歩く者は、自分がどこに行くのか分かりません。

Joh 12:36　自分に光があるうちに、光の子どもとなれるように、光を信じなさい。」／イエスは、これらのことを話すと、立ち去って彼らから身を隠された。

(1) イエスは、問題は倫理的、道徳的なものであると教える。

①光と闇のテーマが繰り返される。

②イエスは光である。

③その光が間もなく消え、闇が襲おうとしている。

④光のある間に、光の子どもとなるために、光を信じなければならない。

⑤いつでも決断できると考えるのは、愚かなことである。

⑥今は「恵みの時、救いの時」である。

(3)「**立ち去って彼らから身を隠された**」

①公生涯最後のメッセージが終わった。

②恵みの時代はいつまでも続かない。

結論：今日の信者への適用

1. 十字架は敗北ではなく、神の栄光の頂点である。
   (1) 栄光とは、成功や繁栄のことではない。
   (2) 神は、苦難や自己犠牲を通して働かれる。
   (3) 自分の人生の意味を十字架の視点で再評価しよう。

2. 実を結ぶ人生は、自己愛ではなく、自己放棄の中にある。
   (1) イエスは、一粒の麦が死ぬときに何が起こるかを教えた。
   (2) 信者は、イエスの生き方に倣うように召されている。

3. 光があるうちに、信仰の決断をする。
   (1) 神の恵みの機会は、永遠には続かない。
   (2)「光がある今、この方に従おう」という緊張感を持って福音に応答する。
   (3) 求道生活が長い人にとっては、真剣な問いとなる。

4. 十字架は、すべての人を引き寄せる力である。
   (1) 私たちは「人を引き寄せる者」ではなく、「引き寄せる主を証しする者」。
   (2) 伝道において、十字架の力と聖霊の働きに信頼しよう。

ヨハネの福音書（38）
「最後の呼びかけ」
ヨハ 12：37～50

1. 文脈の確認
   (1) 前書き（1：1～18）
   (2) イエスの公生涯（1：19～12：50）
      ①公生涯への序曲（1：19～51）
      ②初期ガリラヤ伝道（2：1～12）
      ③最初のエルサレム訪問（2：13～3：36）
      ④サマリア伝道（4：1～42）
      ⑤ガリラヤ伝道の再開（4：43～54）
      ⑥2 度目のエルサレム訪問（5：1～47）
      ⑦後期ガリラヤ伝道（6：1～7：9）
      ⑧3 度目のエルサレム訪問（7：10～10：42）
      ⑨公生涯の締めくくり（11～12 章）
         ＊ラザロの復活（第 7 のしるし）（11：1～44）
         ＊ラザロの復活がもたらした結果（11：45～57）
         ＊マリアによる油注ぎ（12：1～11）
         ＊エルサレム入城（12：12～19）
         ＊一粒の麦が死ぬとき（12：20～36）
         ＊最後の呼びかけ（12：37～50）

2. 注目すべき点
   (1) イエスの公の宣教活動の締めくくりである。
   (2) 13 章以降への橋渡しとしての役割を果たしている。
   (3) 2 つの部分に分かれる。
      ①不信仰な民の霊的背景
      ②最後の呼びかけ

3. アウトライン
   (1) ユダヤ人の不信仰の分析（37～43 節）
   (2) 最後の呼びかけの 5 つのポイント（44～50 節）

4. 結論：今日の信者への適用

最後の呼びかけから、現代的適用を学ぶ。

Ⅰ．ユダヤ人の不信仰の分析（37～43 節）

1. 37 節

Joh 12:37　イエスがこれほど多くのしるしを彼らの目の前で行われたのに、彼らはイエスを信じなかった。

(1) ヨハ 1：11

Joh 1:11　この方はご自分のところに来られたのに、ご自分の民はこの方を受け入れなかった。

①ユダヤ人の不信仰は、ヨハネが最初から書いていたことである。

(2) イエスがメシアであることを示す「7 つのしるし」

①水をぶどう酒に変えた奇跡（2：1～12）
②王室の役人の息子の癒し（4：46～54）
③ベテスダの池での病人の癒し（5 章）
④5 千人のパンの奇跡（6 章）
⑤ガリラヤ湖の嵐を静める奇跡（6：16～21）
⑥生まれつきの盲人の癒し（9 章）
⑦ラザロの復活（11 章）

(3)「信じなかった」とは、「不信仰な状態を続けた」ということ。

①ユダヤ人たちは、頑固な態度を続けた。
②人は、「証拠が足りない」から信じないのではない。
③信じないのは、心の問題である。

2. 38 節

Joh 12:38　それは、預言者イザヤのことばが成就するためであった。彼はこう言っている。／「主よ。私たちが聞いたことを、だれが信じたか。／主の御腕はだれに現れたか。」

(1) ユダヤ人の不信仰は、イザヤによって預言されていた。

①ヨハネは、イザ 53：1 を引用している。
②「だれが信じたか」という質問への答えは、「信じた者は多くはない」である。
③「主の御腕」とは「神の力」。信じない人がその力を体験することはない。

3. 39～40 節

Joh 12:39　イザヤはまた次のように言っているので、彼らは信じることができなかったのである。

Joh 12:40　「主は彼らの目を見えないようにされた。／また、彼らの心を頑なにされた。／彼

らがその目で見ることも、／心で理解することも、／立ち返ることもないように。／そして、わたしが彼らを癒やすことも／ないように。」

（1）不信仰の理由は、イザ 6：9～10 の成就である。

①神は人の不信仰を見越しておられるが、責任は人にある。

②主は彼らに、霊的盲目と心の頑なさをもたらした。

③これは、不信仰に対する神からの裁きでもある。

4. 41 節

Joh 12:41　イザヤがこう言ったのは、イエスの栄光を見たからであり、イエスについて語ったのである。

（1）イザヤはなぜ、そういう預言を語ったのか。

①イザ 6 章で、イザヤは神の栄光を目撃し、預言者として召された。

②ヨハネは、イザヤが見た栄光を「イエスの栄光」と呼ぶ。

③イザヤは、受肉前の御子イエス・キリストを見た。

④これは、ヨハネによるキリストの神性宣言である。

⑤イザヤは、イスラエルはこのイエスを拒否するようになると預言した。

5. 42～43 節

Joh 12:42　しかし、それにもかかわらず、議員たちの中にもイエスを信じた者が多くいた。ただ、会堂から追放されないように、パリサイ人たちを気にして、告白しなかった。

Joh 12:43　彼らは、神からの栄誉よりも、人からの栄誉を愛したのである。

（1）議員たちの多くが、イエスはメシアだと信じた。

①しかし彼らは、信仰告白はしなかった。

②会堂から除名されることを恐れたのである。

③彼らは、神からほめられることよりも、人間による評価の方を気にした。

④これは、現代的テーマでもある。

（2）彼らは、本当に信じ、救われたのか。

①告白をしないのは、救われていない証拠だと考える人もいる。

②救われてはいるが、告白をしていないだけだと考える人もいる。

③救われているなら、時間の経過とともに実を結ぶようになる。

＊アリマタヤのヨセフとニコデモ（ヨハ 19：38～39）

Ⅱ．最後の呼びかけの 5 つのポイント（44～50 節）

＊44～50 節には、イエスがいつ、どこで語ったかの説明がない。

＊イエスのこれまでの教えを、ヨハネが要約していると考えられる。
＊イエスの教えのポイントは、5 つある。

1. 44 節：イエスは父を証言するために来た。

Joh 12:44　イエスは大きな声でこう言われた。「わたしを信じる者は、わたしではなく、わたしを遣わされた方を信じるのです。

(1) イエスを信じることは、父なる神を信じることである。
①イエスと父とは完全に一体である。
②神を信じると言いながら、イエスを信じないことはあり得ないことである。
②イエスを受け入れることが、唯一まことの神を知る道である。

2. 45 節：イエスは父から派遣された。

Joh 12:45　また、わたしを見る者は、わたしを遣わされた方を見るのです。

(1) 父なる神の実態は霊である。
①神を見た者はいない。

(2) イエスは、父なる神を啓示するために来られた。
①イエスが啓示するのは、神の体ではなく、神のご性質である。
②イエスの内に見られるご性質は、父のご性質でもある。

3. 46 節：イエスは光である。

Joh 12:46　わたしは光として世に来ました。わたしを信じる者が、だれも闇の中にとどまることのないようにするためです。

(1) イエスは、この世に輝くシャカイナグローリーである。
①イエスがこの世に来た目的は、私たちを闇から解放するためである。

(2) 信じる者は、どのような闇から解放されたのか。
①いのち、死、永遠に関して無知であったが、イエスにあって真理を見い出した。
②道徳的に闇の中にいたが、そこから解放された。
③サタンの闇の王国から解放され、愛と光の神の御国に導かれた。

4. 47 節：イエスを受け入れる者は救われる。

Joh 12:47　だれか、わたしのことばを聞いてそれを守らない者がいても、わたしはその人をさばきません。わたしが来たのは世をさばくためではなく、世を救うためだからです。

(1) イエスの初臨の目的は、世を救うことである。

①それゆえイエスは、信じない者を裁かない。
②不信者の裁きは、将来のことである（最後の審判）。

5. 48～50 節：イエスを拒否する者は、イエスが語ったことばによって裁かれる。

Joh 12:48　わたしを拒み、わたしのことばを受け入れない者には、その人をさばくものがあります。わたしが話したことば、それが、終わりの日にその人をさばきます。
Joh 12:49　わたしは自分から話したのではなく、わたしを遣わされた父ご自身が、言うべきこと、話すべきことを、わたしにお命じになったのだからです。
Joh 12:50　わたしは、父の命令が永遠のいのちであることを知っています。ですから、わたしが話していることは、父がわたしに言われたとおりを、そのまま話しているのです。」

(1) イエスを信じなかった者が裁かれる基準は、イエスが語ったことばである。
①イエスが語ったことは、すべて父から命じられたことである。
②イエスは、自分の言いたいことを言ったのではない。

(2) 父の命令は、信じる者に永遠の命を与えるものである。
①イエスはそれを知っているので、父が命じるとおりに語っている。

結論：今日の信者への適用

1. **イエスを通して父なる神を見るという視点を回復する。**
   (1) 求道者の私が求めたのは、世界は偶然の産物か、神の作品かということ。
   (2) 神が存在し、死後の世界があるなら、人生の疑問は解決すると思った。
   (3) 神を知りたいなら、まずイエスを見よ。
   (4) イエスのことば、行動、十字架と復活の中に神のご性質が現れている。
2. **知的同意ではなく、全人的な信頼に基づく信仰を回復する。**
   (1)「イエスを知っていること」と「イエスと交流していること」は違う。
   (2) 全人的な信頼とは、イエスとの交わりをこの上なく楽しんでいることである。
3. **私的信仰ではなく、公に告白する信仰を回復する。**
   (1) 信仰の私的化は、現代の信者の問題でもある。
   (2)「神の栄光よりも人間の栄光を愛していないか」との自己吟味が必要である。
   (3) 神からの報奨を期待する信仰生活を送る（キリストの御座の裁き）。
   (4)「わたしが話したことば、それが、終わりの日にその人をさばきます」(12：48)
4. **闇の中ではなく、光の中を歩む生活を回復する。**
   (1) 光の中を歩むとは、御心にかなった歩み、悔い改め、親しい交わりを意味する。
   (2)「信じているか」ではなく、「光の中に歩んでいるか」が問われている。

ヨハネの福音書（39）
「弟子たちの足を洗うイエス」
ヨハ 13：1～20

1. 文脈の確認
   (1) 前書き（1：1～18）
   (2) イエスの公生涯（1：19～12：50）
   (3) イエスの私的奉仕（13：1～17：26）
      ①最後の晩餐（13：1～30）
         ＊弟子たちの足を洗うイエス（13：1～20）
         ＊裏切りを予告するイエス（13：21～30）

2. 注目すべき点
   (1) これは、十字架の死に至る前夜の出来事である。
   (2)「最後までの愛」が中心テーマである。
   (3) 主イエスは、誰もが避ける仕事をされた。
   (4) 主イエスが示された手本から多くの教訓を学ぶことができる。

3. アウトライン
   (1) 弟子たちの足を洗うイエス（1～11 節）
   (2) 模範に従うように教えるイエス（12～20 節）

4. 結論：今日の信者への適用

イエスの弟子として、いかに生きるべきかを学ぶ。

Ⅰ．弟子たちの足を洗うイエス（1～11 節）

1. 1 節

Joh 13:1　さて、過越の祭りの前のこと、イエスは、この世を去って父のみもとに行く、ご自分の時が来たことを知っておられた。そして、世にいるご自分の者たちを愛してきたイエスは、彼らを最後まで愛された。

(1) ヨハネの福音書は、共観福音書よりもイエスの教えについて詳細に記している。
①教えの前に、イエスは行動を起こされた。
②タイミングは、「過越の祭りの前」である。
③イエスは、「ご自分の時」（十字架の時）が来たことを知っておられた。
＊「この世を去って父のみもとに行く、ご自分の時」
④イエスは、十分な自覚と冷静さをもって十字架の時を直視しておられた。

(2) イエスは、「ご自身の者たち」（弟子たち）を特に愛された。

①適用として、すべての信者に広げられる。

②「エイス・テロス」は、「終わりまで」「極限まで」「完全に」という意味を持る。

③単に時間的な終末ではなく、「愛の完成形」が示されている。

④イエスの犠牲的愛は、「律法の完成」である。

2. 2～5 節

Joh 13:2　夕食の間のこと、悪魔はすでにシモンの子イスカリオテのユダの心に、イエスを裏切ろうという思いを入れていた。

Joh 13:3　イエスは、父が万物をご自分の手に委ねてくださったこと、またご自分が神から出て、神に帰ろうとしていることを知っておられた。

Joh 13:4　イエスは夕食の席から立ち上がって、上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。

Joh 13:5　それから、たらいに水を入れて、弟子たちの足を洗い、腰にまとっていた手ぬぐいでふき始められた。

(1) ユダはすでにイエスを売ろうと決めていた。

①悪魔の影響があった。

②イエスはこのことを予見しておられた（ヨハ 6：70～71）。

③悪魔は、十字架を通して神の計画に協力してしまう「逆説的な立場」にいる。

(2) 洗いの儀式の内容

①食事の前に、客に手を洗ってもらう。

②しもべの仕事であるが、主人が行う場合もある。

＊水差しと鉢を使って、客の手に水を注ぐ。

＊腰に吊るしたタオルで手を拭く。

③この箇所では、イエスがしもべの役割を果たしている。

＊しかも、洗うのは手ではなく足である。

(3) 一連の行為は、イエスの受肉の象徴である。

①上着を脱ぐ。栄光を離れたイエスの受肉。

②手ぬぐいを腰に巻く。しもべの姿を取ったメシア。

③ピリ 2：6～7 と対応する、予表的行動である。

3. 6～7 節

Joh 13:6　こうして、イエスがシモン・ペテロのところに来られると、ペテロはイエスに言った。「主よ、あなたが私の足を洗ってくださるのですか。」
Joh 13:7　イエスは彼に答えられた。「わたしがしていることは、今は分からなくても、後で分かるようになります。」

(1) ペテロは、主であるイエスがしもべになっていることに驚いた。
①「あなたが、私の足を」（語順による対比）
＊「あなたのようなお方が、私のような者の足を」
②ペテロは、栄光の王としてのメシア観に固執していた。

(2) イエスは、「後で分かるようになります」と言われた。
①「出来事が完了した後に」という時間感覚である。
②十字架、復活、昇天、聖霊降臨によって、分かるようになる。
③イエスの行為は、贖い・清め・愛の本質を象徴している。
④それは、聖霊による啓示なしには理解できない性質のものである。

4. 8 節

Joh 13:8　ペテロはイエスに言った。「決して私の足を洗わないでください。」イエスは答えられた。「わたしがあなたを洗わなければ、あなたはわたしと関係ないことになります。」

(1) 思慮のないことばは、ペテロの特徴である。
①「決して」「洗わないで」という二重否定。
＊ペテロの自信と頑なさを示すことば
②弟子の特徴は主に対する従順であるが、ペテロはそれに反している。

(2)「**わたしがあなたを洗わなければ、あなたはわたしと関係ないことになります**」
①「関係ない」とは、深い意味での霊的つながりのことである。
＊イエスの清めを拒否するなら、イエスとの交わりを保つことができない。
＊ここでの「関係」は、救いの関係ではなく、交わりの関係である。
②さらに、思慮に欠けるペテロのことばが続く。

5. 9〜11 節

Joh 13:9　シモン・ペテロは言った。「主よ、足だけでなく、手も頭も洗ってください。」
Joh 13:10　イエスは彼に言われた。「水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。全身がきよいのです。あなたがたはきよいのですが、皆がきよいわけではありません。」
Joh 13:11　イエスはご自分を裏切る者を知っておられた。それで、「皆がきよいわけではない」と言われたのである。

(1) ペテロは、極端から極端へと移動する。

①「足だけでなく、手も頭も洗ってください」

(2) それに対するイエスの教え

①水浴した者は、家に帰ると足を洗うだけでよい。

②「水浴」は、全身を洗う行為で、救いの象徴である。

＊一度限りの「義認」を意味している。

③「足を洗う」は、部分的・日常的な清めの象徴である。

＊信者の日々の罪の告白と清めを指す。

④イエスを信じた者は、再度信じ直す必要はない。

(3) イエスは、ユダの裏切りを知っておられた。

①イエスのそばにいても、救われていない人がいる。

＊教会という共同体の中にいることと、救われていることは別問題である。

②ヨハネは、イエスの超自然的知識を強調している。

Ⅱ．模範に従うように教えるイエス（12〜20 節）

1．12〜15 節

Joh 13:12　イエスは彼らの足を洗うと、上着を着て再び席に着き、彼らに言われた。「わたしがあなたがたに何をしたのか分かりますか。

Joh 13:13　あなたがたはわたしを『先生』とか『主』とか呼んでいます。そう言うのは正しいことです。そのとおりなのですから。

Joh 13:14　主であり、師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのであれば、あなたがたもまた、互いに足を洗い合わなければなりません。

Joh 13:15　わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、あなたがたに模範を示したのです。

(1) イエスは、教える者としての立場に戻った。

①ユダヤ的教育法に則している。

②行動→問い→解説

(2) イエスを「先生（ディダスカロス）」、「主（キュリオス）」と呼ぶのは正しい。

①弟子たちよりも上位にあるイエスが、しもべの役割を果たした。

②これは、弟子たちへの模範であり、「従うべき型（パターン）」である。

③下位の者は、この命令に従うしかない。

(3) 洗足は、聖礼典に含めるべきではない。

①当時と今では、生活環境が違う。靴下と靴を履いている。

②イエスは、物理的な儀式ではなく、心の在り方を教えている。

③聖礼典の 3 つの条件が満たされていない。

＊イエスが「くり返し実施せよ」と命令しておられる。

＊使徒の働きの中でそれが実行されている。

＊書簡の中でその意味が解説されている。

2. 16〜17 節

Joh 13:16　まことに、まことに、あなたがたに言います。しもべは主人にまさらず、遣わされた者は遣わした者にまさりません。

Joh 13:17　これらのことが分かっているなら、そして、それを行うなら、あなたがたは幸いです。

(1) ユダヤ教のラビ文献に見られる格言

①イエスの模範に従わないなら、自分をイエスよりも高く置くことになる。

②これは、初代教会における権威と奉仕の正しい関係のモデルである。

(2) クリスチャンは、知識の量によって祝福されるのではない。

①理解したことを実行することによって祝福される。

②これは、御国での役割や報奨に直結する霊的原則である。

3. 18 節

Joh 13:18　わたしは、あなたがたすべてについて言っているのではありません。わたしは、自分が選んだ者たちを知っています。けれども、聖書に『わたしのパンを食べている者が、わたしに向かって、かかとを上げます』と書いてあることは成就するのです。

(1) 祝福されない弟子が一人いる。イスカリオテのユダである。

①「神の選び」と「人間の責任」の緊張関係が見られる。

②ユダの選びは、「預言の成就」として計画されたものであり、偶然ではない。

(2) 詩 41：9 は、メシア預言である。

Psa 41:9　私が信頼した親しい友が／私のパンを食べている者までが／私に向かって　かかとを上げます。

①ダビデは、アヒトフェルによって裏切られた。

②裏切り者は、外部ではなく、内部から現れる。

4. 19～20 節

Joh 13:19　事が起こる前に、今からあなたがたに言っておきます。起こったときに、わたしが『わたしはある』であることを、あなたがたが信じるためです。

Joh 13:20　まことに、まことに、あなたがたに言います。わたしが遣わす者を受け入れる者は、わたしを受け入れるのです。そして、わたしを受け入れる者は、わたしを遣わされた方を受け入れるのです。」

(1) イエスの予告は、後になってイエスを信じるための証拠となった。

①イエスは、永遠の神である。

(2) 神はイエスを派遣し、イエスは弟子たちを派遣する。

①弟子たちを受け入れることは、イエスを受け入れることである。

②イエスを受け入れることは、父なる神を受け入れることである。

③教会時代の権威の継承

＊キリストから使徒へ

＊使徒から教会へ

今日の信者への適用

1. イエスの愛に倣う。

(1) 相手のために仕える愛を実践する。

(2) 失敗する人、裏切る人にも、最後まで愛を持って接する。

2. イエスのへりくだりに倣う。

(1) 自分より弱い立場の人、汚れた人に仕えることをいとわない。

(2) 人に気づかれない「しもべ的奉仕」を大切にする。

(3) 罪を犯した兄弟に対して、回復と清めが実現するような姿勢を取る（ガラ 6:1）。

3. イエスに足を洗っていただく。

(1) へりくだった人は、イエスに足を洗っていただくことを受け入れる。

(2) 日々、主の前に罪を認め、交わりを保つための告白を実行する（1 ヨハ 1：9）。

(3)「清さ」が奉仕の前提条件であることを認識する。

4. イエスが体験した裏切りに備える。

(1) 内側からの裏切りは、現実に起こり得る。

(2) 神の主権を信じ、動揺しない。

5. イエスに派遣された大使として奉仕する。

(1) 家庭でも職場でも、主の代理人として、誠実に、真実をもって生きる。

(2) 説教者は、自分のことばではなく、遣わした方の権威に基づいて語る責任がある。

ヨハネの福音書（40）
「裏切りを予告するイエス」
ヨハ 13：21～30

1. 文脈の確認
   (1) 前書き（1：1～18）
   (2) イエスの公生涯（1：19～12：50）
   (3) イエスの私的奉仕（13：1～17：26）
      ①最後の晩餐（13：1～30）
         ＊弟子たちの足を洗うイエス（13：1～20）
         ＊裏切りを予告するイエス（13：21～30）

2. 注目すべき点
   (1) これは、十字架の死に至る前夜の出来事である。
   (2) 主イエスは、弟子たちの足を洗われた。
   (3) 主イエスは、ユダの裏切りを知っておられた。
   (4) それでもなお、彼を愛し続けられた。
   (5) 夜の闇の中でも、神の計画は静かに進んでいた。

3. アウトライン
   (1) 裏切りを予告するイエス（21 節）
   (2) 当惑する弟子たち（22～25 節）
   (3) ユダに語りかけるイエス（26～29 節）
   (4) その場を去るユダ（30 節）

4. 結論：今日の信者への適用

イエスの最後まで愛し続ける愛について学ぶ。

Ⅰ．裏切りを予告するイエス（21 節）

1. 21 節

Joh 13:21　イエスは、これらのことを話されたとき、心が騒いだ。そして証しされた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。あなたがたのうちの一人が、わたしを裏切ります。」

(1)「**これらのことを話されたとき**」
①自分が選んだ者たちの一人は裏切り者である。
②弟子の裏切りの話をしたとき、イエスは「心が騒いだ」。

(2) ヨハネの福音書は、イエスが「神の子」であることを強調している。

①イエスは、神である。

②イエスは、ユダの裏切りを予知しておられた。

③それでも、人としてのイエスの心は、大きく動揺した。

④これは、イエスの完全な人間性の証しである。

(3)「**あなたがたのうちの一人が、わたしを裏切ります**」

①これは、ユダの裏切りの 3 度目の予告である。

②これは、イエスがユダに与えた最後の悔い改めの機会である。

③神の主権と人間の責任が交差する重大な場面である。

④ユダは、それに応答しなかった。

⑤この予告は、他の弟子たちを守るためのものでもあった。

II．当惑する弟子たち（22～25 節）

1．22 節

Joh 13:22　弟子たちは、だれのことを言われたのか分からず当惑し、互いに顔を見合わせていた。

(1) 弟子たちは当惑した。

①ユダが裏切り者だとは誰も考えなかった。

②ユダは巧妙に、自分の本音を隠していた。

(2) 弟子たちがイエスのことばを理解できなかった 3 つの理由

①ユダは、目立つ行動をしていなかった。

＊3 年間、イエスに従い、しかも会計係として信頼されていた。

②弟子たちは、霊的に鈍感であった。

＊裏切りということばの重みが、直ちには心に届かなかった。

③ユダの偽善は、底なしの深さであった。

＊「弟子らしさ」を保ちながら、内面ではイエスを売ろうと計画していた。

2．23～24 節

Joh 13:23　弟子の一人がイエスの胸のところで横になっていた。イエスが愛しておられた弟子である。

Joh 13:24　そこで、シモン・ペテロは彼に、だれのことを言われたのか尋ねるように合図した。

(1) イエスと弟子たちの位置関係

①「イエスが愛しておられた弟子」とは、ヨハネのことである。

＊これは、主との関係性におけるアイデンティティの強調である。

②右端からヨハネ、イエス、ユダ、…最後にペテロ。

③ヨハネが 1 番目の上席、ユダが 2 番目の上席に着いていた。

＊イエスの胸のところで横になっているように見える。

(2) ペテロは、イエスに聞くようにと、ヨハネに合図を送った。

①イエスとヨハネの間に親密な師弟関係がある。

②位置関係から言うと、ヨハネは個人的な質問をすることができた。

(3) 裏切り者の特定は、いわば密室で行われている。

①一連のやりとりが、他の弟子たちにはあまり気づかれない形で進んでいる。

②これは、ユダへの最終的な猶予の瞬間である。

3. 25 節

Joh 13:25　その弟子はイエスの胸元に寄りかかったまま、イエスに言った。「主よ、それはだれのことですか。」

(1) 食事中の会話であっても、非常に親密かつ私的なものである。

①他の弟子たちには聞こえなかった可能性が高いと考えられる。

②イエスの心に寄り添う者にこそ、深い真理が明かされる。

③イエスは、非常に個人的かつ象徴的な方法で応じる。

Ⅲ．ユダに語りかけるイエス（26～29 節）

1. 26～27 節

Joh 13:26　イエスは答えられた。「わたしがパン切れを浸して与える者が、その人です。」それからイエスはパン切れを浸して取り、イスカリオテのシモンの子ユダに与えられた。

Joh 13:27　ユダがパン切れを受け取ると、そのとき、サタンが彼に入った。すると、イエスは彼に言われた。「あなたがしようとしていることを、すぐしなさい。」

(1) テーブルの上に用意された食事（出エジプトを記念する食物）

①子羊のロースト

②種なしパン（マッツァ）

③カルパス（野菜。パセリやレタス）

④ハロセット（リンゴ、ナッツ、蜂蜜、シナモン、レモンジュース、ワイン）

⑤マロール（苦菜。西洋わさび）

(2) 主人は、マッツアでハロセットを挟んで、客全員に配る。
①ハロセットには、苦菜の苦さを和らげる目的があった。
②「パン切れを浸して与える」というのは、親しみと敬意を表す行動の一つ。

(3) ヨハネの質問に対して、イエスも密かに答えたことであろう。
①「**わたしがパン切れを浸して与える者が、その人です**」
②イエスは、友情のしるしとしてユダにハロセットを与えた。
③ユダには、悔い改めの機会が与えられた。

(4)「**そのとき、サタンが彼に入った**」
①これは、聖書の中で最も恐ろしいことばである。
②これは、字義どおりに解釈すべきである。
③ユダは、完全にサタンの手先となった。
④ヨハ 13：2 では、「サタンが心に思いを入れていた」となっている。

(5)「**あなたがしようとしていることを、すぐしなさい**」
①「あなたがしようとしていることを、もっと早くしなさい」の意。
②すべての状況を支配しているのは、サタンではなくイエスである。
③ユダヤ人の指導者たちは、イエスの逮捕を過越の祭り以降に予定していた。
④しかし、神の子羊イエスは、過越の祭りの間に死ぬ必要があった。
⑤食事の席で、激しい霊的戦いが戦われていた。

2. 28～29 節

Joh 13:28　席に着いていた者で、なぜイエスがユダにそう言われたのか、分かった者はだれもいなかった。
Joh 13:29　ある者たちは、ユダが金入れを持っていたので、「祭りのために必要な物を買いなさい」とか、貧しい人々に何か施しをするようにとか、イエスが言われたのだと思っていた。

(1) ヨハネによる回顧
①弟子たちは、ユダが裏切り者であることに気づいていなかった。
②ヨハネ自身も、気付いていなかった。
③ユダの偽善の完成が見られる。最後まで「弟子らしさ」を演じきった。
④弟子たちは、メシアの受難という概念を理解していなかった。

(2)「**あなたがしようとしていること**」ということばを誤解した。
①祭りのために必要な物を買う。

②貧しい人々への慈善を行う。

Ⅳ．その場を去るユダ（30 節）

1．30 節

Joh 13:30　ユダはパン切れを受けると、すぐに出て行った。時は夜であった。

(1) ユダは、すぐに出て行った。

①神の恵みの交わりの場から完全に離脱した。

②彼の心の状態を反映する象徴的行為である。

(2)「時は夜であった」

①ヨハネの福音書では、このことばに特別な意味がある。

②霊的闇への没入を象徴している。

③「光と闇」の対比が重要なテーマとなっている（ヨハ 1：4〜5、3：19、8：12）。

④「夜」はまさにサタンの活動の時間であり、神からの断絶を象徴している。

結論：今日の信者への適用

1．信仰共同体の中に存在する偽善に備えよう。

(1) ユダは、最後まで「弟子の姿」を演じきった。

(2) 彼の心は、徐々にイエスから離れ、ついにはサタンに明け渡された。

(3) 今日の教会の中にも、忠実に見えても、内面では主から離れている人が存在する。

(4) 絶えず偽善に備えると同時に、自らを吟味する必要がある。

2．主イエスの赦しの愛を受け入れよう。

(1) イエスは、最初からユダの裏切りを知っておられた。

(2) それでもなお、彼にパンを与えるという「愛と尊敬のしるし」を示された。

(3) ユダは、イエスの愛を拒否した。

(4) 悔い改めと信仰によって主に立ち返る道は常に開かれている。

(5) 悔い改めの猶予には限りがあることを覚えよう。

3．主イエスとの親密な交わりを大切にしよう。

(1)「愛された弟子」ヨハネは、イエスの胸に寄りかかっていた。

(2) 彼は、裏切り者の正体を最も早く知った弟子であった。

(3) 私たちも、主の御声を聞くために、日々主との親密な交わりを深める必要がある。